

石川県 金沢市

# 金沢城 惣構跡 VI

～東内惣構跡（枯木橋南地点）発掘調査報告書～

平成26年3月

（2014年）

金 沢 市

（金沢市埋蔵文化財センター）

石川県 金沢市

# 金沢城 惣構跡 VI

～東内惣構跡（枯木橋南地点）発掘調査報告書～

平成26年3月

(2014年)

金 沢 市

(金沢市埋蔵文化財センター)

# 例 言


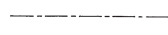
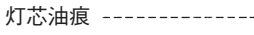
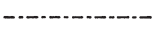
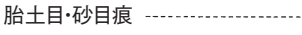
1. 本書は、金沢市埋蔵文化財センターが金沢市歴史建造物整備課の依頼で発掘調査を行った、「東内惣構跡（尾張町）保存整備事業」に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 東内惣構跡（枯木橋南地点）は金沢市尾張町1丁目7番地内にあり、平成24年11月20日～同年12月20日にかけて現地での発掘調査を行った。
3. 発掘調査は金沢市埋蔵文化財調査委員会（委員長：谷内尾 晋司、委員：垣田 修児 小嶋 芳孝 横山 方子 敬称略・50音順）の指導の下、前田 雪恵（金沢市文化財保護課主任主事）が行った。
4. 本書の指示は以下のとおりである。
  - ①方位は全て磁北で座標は国土座標第Ⅶ系に準拠する。水平基準は海拔高で単位は(m)である。
  - ②遺構図、遺物図の縮尺は原則としてスケールを付した。
  - ③遺物図の凡例は下記および次頁の凡例のとおりである。
    - 図版内の遺物番号は、遺物観察表および写真図版のそれと一致する。
    - 遺物観察表については以下のとおりである。
      - ・計測値の単位は(mm) (g)を最小単位としている。
      - ・「器種」欄には土器の材質および種類を判明する範囲で記載している。
      - ・「遺存」欄には復元した部位とその遺存率を記してある。
      - ・「実測番号」欄は遺物を実測する際、便宜上、遺物・実測図につけた番号である。
5. 本書の編集・執筆はおおむね前田が行ったが、第3章第3節は楠 正勝（埋蔵文化財センター担当所長兼所長補佐）が執筆し、遺物写真は景山 和也（文化財保護課主査）が撮影した。印刷費は歴史建造物整備課が負担した。
6. 発掘調査で出土した遺物、作成した図面、写真等は、金沢市埋蔵文化財センターが一括して保存している。

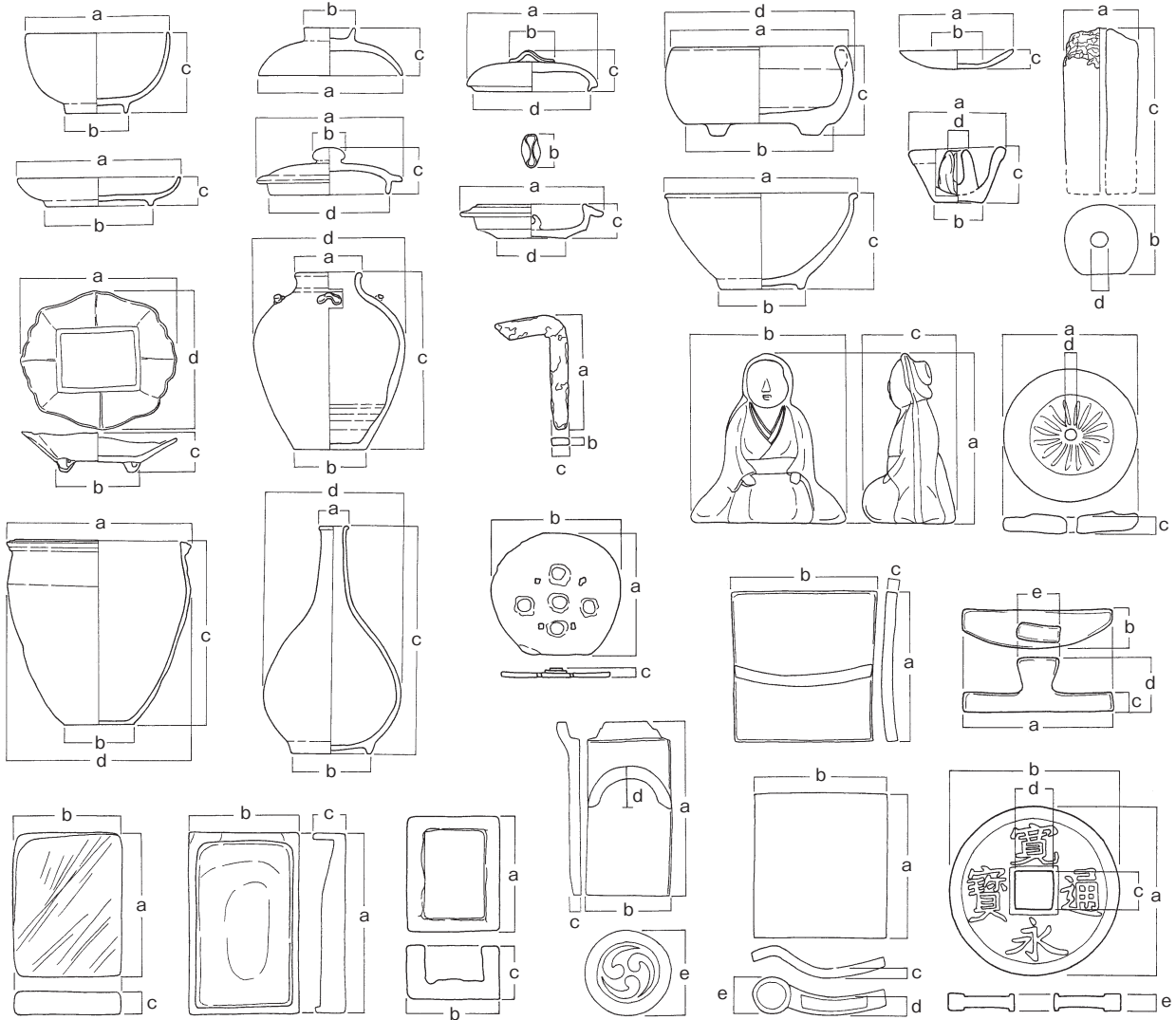
# 目 次

第1章	遺跡周辺の位置と環境	1
	第1節 地理的環境	
	第2節 歴史的環境	
	第3節 既往の調査	
第2章	調査に至る経緯と経過	5
	第1節 調査に至る経緯	
	第2節 調査の経過	
第3章	調査の報告	7
	第1節 調査区の概要	
	第2節 遺構	
	第3節 遺物	
第4章	総括	24
	写真図版	
	報告書抄録	

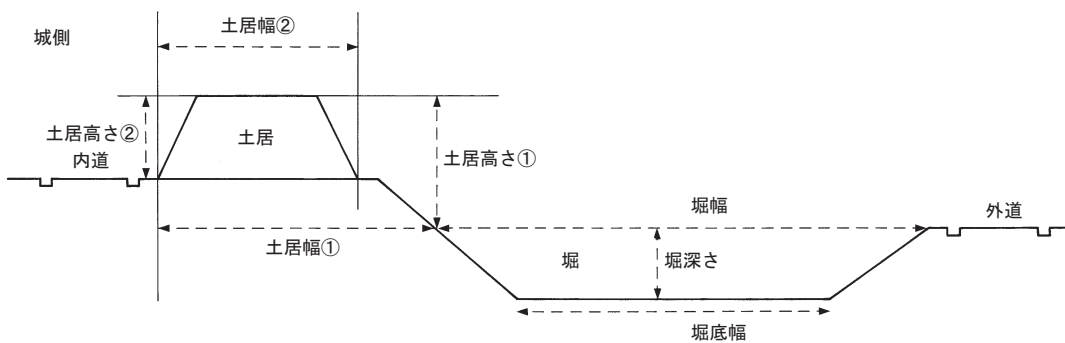
# 凡例

- (1) 遺物実測図の縮尺は、表題部分に記した。  
 (2) 遺物実測図で必要な区分は以下のように記した。

青磁釉  釉 薬  灯芯油痕   
 漆継ぎ  胎土目・砂目痕 



- (3) 惣構の規模等を示す名称は以下のように記した。



# 第1章 遺跡周辺の位置と環境

## 第1節 地理的環境

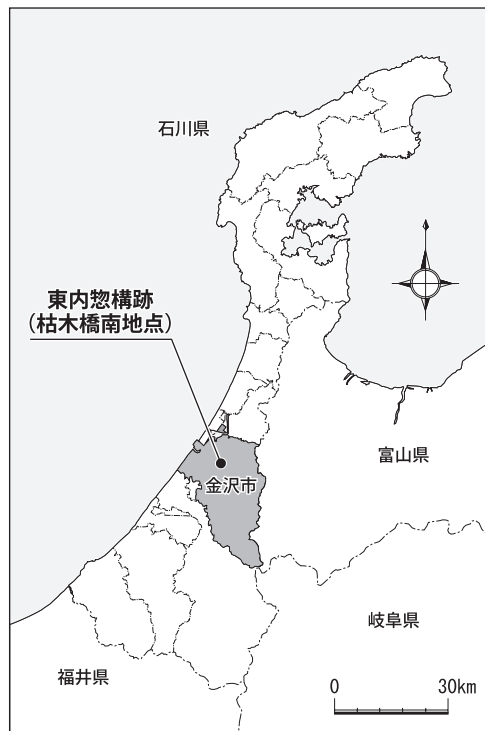
石川県は南北に細長い県で、能登半島（能登地方）と半島の基部から南西にのびる沿岸部（加賀地方）から成り立っている。北と西は日本海に面し、東は富山県と富山湾、南西は福井県、南東は岐阜県と接している。

金沢市は石川県の中央部に位置し、北は河北郡内灘町・津幡町に、東は富山県小矢部市・南砺市に接し、南は石川県白山市・野々市市に、西は日本海に接する。その地形は、南東部の山地、北西部の金沢平野に大別できる。市の最南端にある標高1,644mの奈良岳は犀川の源流域であり、富山県境にある標高939mの医王山は浅野川の源流域である。この二つの河川は市域を横断し、日本海に注いでいる。浅野川以北の沿岸には、内灘砂丘とその内側に形成された潟湖、河北潟がある。河北潟の約8割は19世紀後半から1985年までに行われた埋立てと干拓によって、農地となっている。

金沢平野は犀川を境に南部平野と北部平野に分けられる。北部平野は犀川、浅野川、金腐川、森下川などにより運ばれた礫、砂泥、シルト、粘土で形成された沖積平野で、低湿で傾斜が緩やかである。古くから自噴地下水が各地でみられ、灌漑用や生活用として使用されてきた。一方、南部平野は犀川、手取川、伏見川により形成された扇状地で、起伏の多い地形である。地盤は礫、砂泥層の互層で一般的に水はけがよい。

東内惣構跡（枯木橋南地点）は犀川と浅野川に挟まれた舌状台地の突端の下部にあたる。突端の上部は江戸時代を通じて加賀藩主・前田家の居城であった金沢城跡があり、調査地点から直線距離にして南西350m、高さ約15m上となる。金沢城跡は明治以降、兵部省の管轄となり、第二次大戦後は金沢大学となって、常に人が集まる場所であった。平成8年からは石川県の管轄で金沢城公園となり、無料開放されている。

調査地点は通称百万石通りに面しており、これを北に60m進むと橋場交差点（三叉路）に着く。交差点の先の2方向は旧の北国街道を踏襲している国道159号線である。交差点を北に直進するとすぐ浅野川を渡る浅野川大橋がある。橋のたもとから下流（北西方向）の川沿いに「主計町重要伝統的建造物群保存地区」、さらに橋をこえて90m先から山手（北東方向）にかけては「東山ひがし重要伝統的建造物群保存地区」「卯辰山山麓重要伝統的建造物群保存地区」がある。交差点を西に折れて730m先の武蔵ヶ辻交差点までは、江戸時代から高度経済成長期まで金沢の繁華街であり、今でも江戸時代から続く老舗が複数営業している。



第1図 石川県金沢市の位置図(S=1/200,000)

## 第2節 歴史的環境

調査地点周辺の地形は河岸段丘下に位置するため、西側は急崖を形成する。周辺地域の最古の生活痕跡としては、金沢城石川門前土橋および車橋門調査区の盛土層から旧石器時代後期の剥片石器がみつかり、出土地点を含む一帯が狩猟場であったと想定されている。

**縄文時代**の遺跡は、前田氏（長種系）屋敷跡で落とし穴が見つかり、

**弥生時代**の遺跡としては、同じく前田氏（長種系）屋敷跡があり、弥生時代後期後半から終末期の墳丘墓跡が中心部に1基、その周りに木棺跡4基が検出されている。本町一丁目遺跡からは、終末期の集落跡がみつかり、また、広坂遺跡、高岡町遺跡でも弥生時代後期～古墳時代前期の遺構が確認されている。

**飛鳥時代**の遺跡としては高岡町遺跡があり、日本に伝来しなかったと考えられていた半瓦当<sup>がとう</sup>が出土した他、奈良二彩や銅製帯金具が出土するなど特異な性格をもつ集落跡である。

**奈良時代**に入ると、広坂遺跡で藤原宮式軒平瓦と平城宮式軒瓦が出土しており、古代寺院の存在が想定されている。また、前田氏（長種系）屋敷跡からは粘土採掘土坑跡や小穴跡が検出され、古代の土器が出土している。

**中世**には、広坂遺跡では礎石建物跡や堀跡が検出されており、高岡町遺跡で薬研堀が検出された他、彦三<sup>ひこそ</sup>遺跡でも溝と遺物が報告されている。戦国時代には、浄土真宗本願寺が現在の金沢城がある場所に金沢御堂<sup>みどう</sup>を建立し、周囲には寺内町が形成されたと考えられるが、明確な遺構が検出されていないため、詳細は不明である。

**近世**の調査地点は東内惣構となっている。惣構とは城を防御するために造られた堀や土居のことで、金沢には内と外の二重に惣構が造られた。内惣構は二代藩主前田利長が高山右近に命じて慶長4年（1599年）に、外惣構は三代藩主前田利常が慶長15年（1610年）に篠原一孝に命じて造らせたと言われている。しかし平成24（2012）年に公開された初代藩主正室の書状によって、1610年に篠原一孝は名古屋城の普請に出役していたことがわかり、また当時の前田家はすでに徳川幕府に恭順的な姿勢であったことから、外惣構の築造年代やその意義を再考する動きがある。

調査地点の350m南西には金沢城があり、石川県立埋蔵文化財センターが発掘調査を行いながら復元を進めている。また金沢城に隣接する兼六園は、江戸時代には寺院、家臣の屋敷地、作事所、藩校、庭園と姿を変えて利用されてきた。明治以降、市民に解放され、金沢市の主要な観光地となっている現在の姿は、幕末に築造された十三代藩主生母の隠居所が元になっている。その縁辺には三代藩主の正室（徳川家康の孫）の輿入れの際、江戸から付き添ってきた人々が居住した長屋があり、江戸町遺跡として発掘・報告されている。

この他、上級武士の屋敷跡が見つかった下本多遺跡、前田氏（長種系）屋敷跡、武家の下屋敷跡が検出された穴水町遺跡や、武家地を調査した彦三町遺跡、兼六元町遺跡、長町遺跡、武家地と町家が隣接する地点を調査した安江町遺跡、町家跡である東山一丁目遺跡、昭和町遺跡、本町一丁目遺跡、高岡町遺跡、下堤<sup>しもつつみ</sup>・青草町遺跡<sup>あおくさまち</sup>、醒ヶ井遺跡<sup>さめが井</sup>、瓢箪町遺跡など多数の遺跡が周囲に存在する。

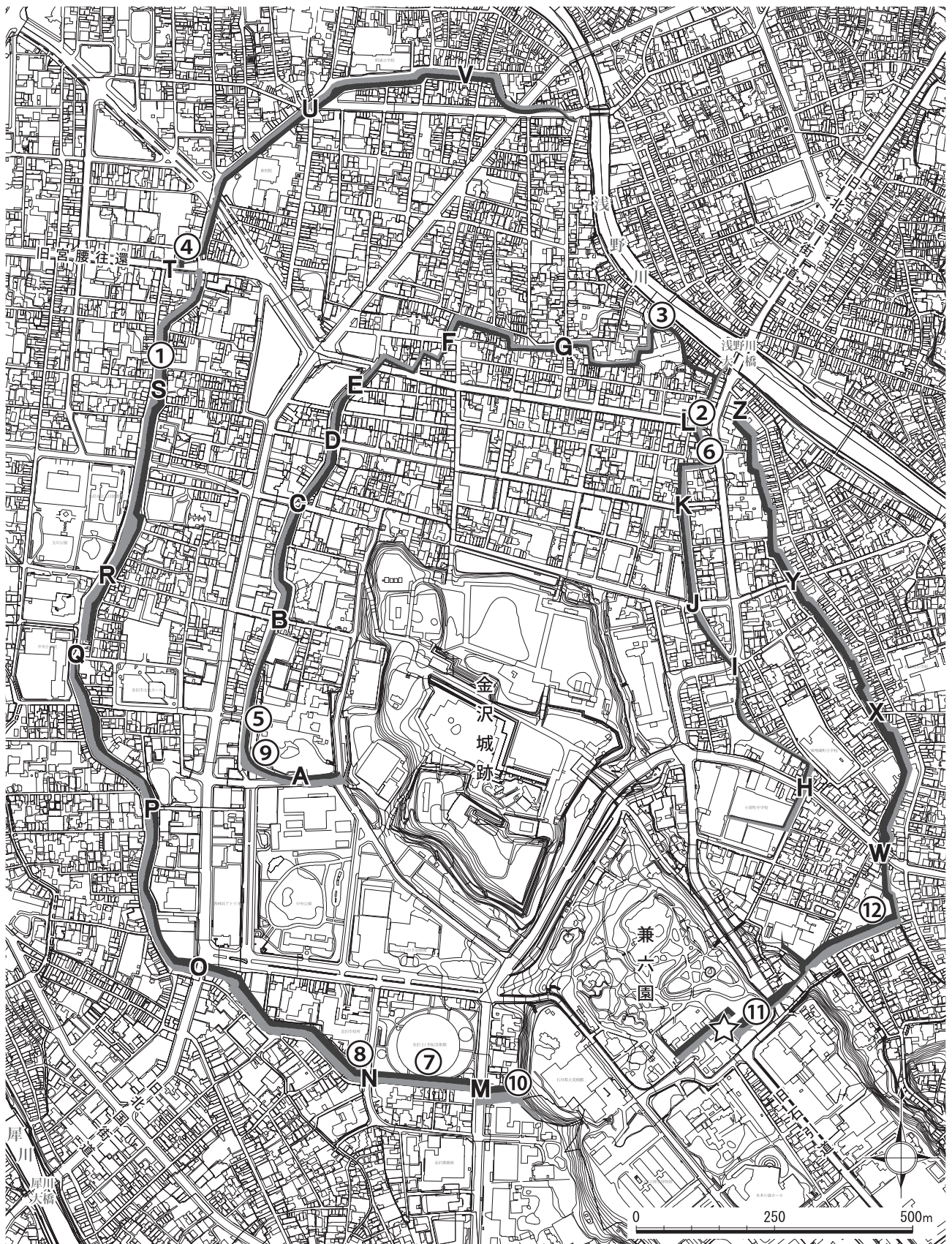
参考文献 (株)角川書店 1981年 『角川日本地名大辞典 17石川県』

金沢市 1999年 『金沢市史 資料編19 考古』

金沢市 2008年 『金沢城 惣構跡Ⅰ』

金沢市立前田土佐守家資料館 2012年 『図録 芳春院まつの書状』

木越隆三 2013年 「金沢の惣構創建年次を再検証する」『日本歴史』780号 吉川弘文館



- ①西外惣構跡（武蔵町地点） ②東内惣構跡（枯木橋北地点） ③西内惣構跡（主計町地点） ④西外惣構跡（升形地点）  
 ⑤西内惣構跡（尾山神社西地点） ⑥東内惣構跡（枯木橋南地点） ⑦広坂遺跡（土居・内道）・金沢 21 世紀美術館南側水路（堀）  
 ⑧宮内橋詰遺構（土居・堀） ⑨尾山神社南側（土居） ⑩西外惣構跡（本多町 3 丁目地点） ⑪兼六園 山崎山（土居・堀） ⑫常福寺裏（土居）  
 A\*金谷外柵御門前土橋 B\*不明御門前土橋 C西町橋 D十間町橋 E近江町橋 F袋町橋 G新町橋 H\*（奥村内膳殿）後惣構土橋  
 I 九人橋 J 蔵人橋 K 稻荷橋 L 枯木橋 M 豊屋橋 N 宮内橋 O 香林坊橋 P 右衛門橋 Q\*村井又兵衛殿前橋 R\*長又三郎殿前土橋  
 S 図書橋 T 升形橋 U 東末寺橋 V 塩屋町土橋 W 剣崎辻橋 X 備中橋 Y 下材木町橋 Z 小鳥屋町橋 ☆山崎山横虎口（仮称）  
 註：A～Zは橋名で、\*を付さない橋は『金沢城惣構絵図』（文化八年・1811年）、\*を付した橋は『道橋帳写』（文政七年・1824年）による。

第2図 金沢城惣構跡と関連調査の位置(S=1/10,000)

### 第3節 既往の調査

金沢市では、平成20年12月に金沢城惣構跡を市指定史跡とし、平成23年4月に惣構に囲まれた範囲を周知の埋蔵文化財包蔵地として金沢城下町遺跡と名付けた。

これまでに金沢市が惣構跡において学術目的で発掘調査を行った箇所（番号は第2図と共通）とその成果報告書を第1表にまとめた。

このほかにも開発目的の発掘調査で見つかった惣構跡や、現存する土居などの痕跡があり、それらは『金沢城惣構跡Ⅰ』に詳しく記されている。一般向けには、平成22年度までの発掘調査成果と現在に残る遺構を紹介した「金沢指定史跡 金沢城惣構跡」というパンフレットを発行しており、平成24年3月に刊行したものが最新版である。以下、既往の発掘調査について簡単にのべる。

#### ①西外惣構跡(武蔵町地点)発掘調査

土居と堀を検出し、堀は3段階の変遷が確認できた。1610年頃の築造当初は堀幅14mで、17世紀末～18世紀初め頃は東岸を改築し堀幅11mとなり、19世紀に堀の大半を埋めている。堀の堆積土に含まれる植物を分析した結果、堀は淀んだ状態であり、土居には松が植えられていたことがわかった。

#### ②東内惣構跡(枯木橋北地点)発掘調査

北国街道と城下町の結節点にある枯木橋に近接する箇所である。明治時代に建設された現水路の背後に、2時期の石垣を検出した。また現水路の石垣の一部に、築造当初の石積みのない堀岸がみえることが確認された。現在は復元展示がなされている。

#### ③西外惣構跡(武蔵町地点)発掘調査

調査地点は①から約10mの位置にある。惣構築造当初の、素掘りの堀の東斜面（城側の斜面）を検出した。堀幅は推定約9.8m、土居の裾幅は推定約9.5m、堀底は2.5m以上である。幕末から明治にかけて堀を埋め立てている。①と近接した地点であるが、堀の規模や埋め立て時期が異なっている。

#### ④西内惣構跡(主計町地点)発掘調査

築造当初の惣構は、堀岸が河川敷のようになだらかであったが、徐々に造成されてゆき、幕末～明治時代に埋め戻されるまで堀幅10mを保っていた。他の地点では17世紀には堀を狭めはじめることが多いなかで、希少な例である。現在、緑水苑と名付けられている緑地の一部である。

#### ⑤西外惣構跡(升形地点)発掘調査

惣構が街道と交差する地点に、堀と土居を屈曲させて敵の直進を阻害する施設で、金沢城下に唯一現存する升形遺構である。その北角と西角が検出された。7期の変遷が確認され、初期は土居側の堀岸に石積みを伴わない。しかしⅡ期、17世紀中頃はすでに升形の中に町家が建設され、Ⅳ期、17世紀末～18世紀初めには西堀の埋め立てが始まる。Ⅶ期、明治時代には西・北とも堀が大規模に埋められて完全に宅地となっている。

場所	現地調査年 (西暦)	惣構名/ 調査地点	面積 (㎡)	発掘調査報告書 (発行者は全て金沢市(金沢市埋蔵文化財センター))
①	2005	西外/武蔵町	100	2008年 『金沢市文化財紀要252 金沢城惣構跡Ⅰ』
②	2006	東内/枯木橋北	50	
③	2009	西外/武蔵町	160	2011年 『金沢市文化財紀要263 金沢城惣構跡Ⅲ』
④	2008・2009	西内/主計町	67	2011年 『金沢市文化財紀要269 金沢城惣構跡Ⅱ』
⑤	2008～2010	西外/升形	330	2012年 『金沢市文化財紀要276 金沢城惣構跡Ⅳ』 ※遺構編
				2013年 『金沢市文化財紀要285 金沢城惣構跡Ⅴ』 ※遺物編
⑥	2012	東内/枯木橋南	10	2014年 『金沢市文化財紀要292 金沢城惣構跡Ⅵ』 (本書)

第1表 既往の発掘調査および刊行された報告書



## 第2章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

金沢市では、惣構跡について平成18年度に復元整備のマスタープランを策定し、さらに平成21年1月に「金沢市歴史的風致維持向上計画」を策定し国の認可をうけている。これらに基づいて惣構跡の学術調査や復元整備を行っており、今回の調査もその一つである。

国道159号線の道路拡幅に伴い用地の一部を買収される宅地のうち、居住者が転出したところを、金沢市文化財保護課が発掘調査したうえで、歴史建造物整備課が惣構を活かした保存整備をすることになっている。調査対象地は尾張町1丁目42-1、43-1号(土地台帳による。住居表示では7番14号)で、面積は約43㎡である。

### 第2節 調査の経過

調査対象地は市指定史跡(金文第223号 平成20年12月26日指定)内であるため、まず平成24年10月12日付けで「指定文化財現状変更承認申請書」を金沢市教育委員会に提出した。また同年10月26日付けで「発掘調査報告」を石川県教育委員会に提出した。

現地調査は平成24年11月20日から同年12月20日まで行った。遺構の破壊を最小限に止めるため、惣構遺構に対して垂直方向のトレンチを2本(平面積の合計約10㎡)設けた。表土から最深部まで全て人力で掘削したが、たびたび降雨や積雪によって調査を中断せざるを得ない日があった。

埋戻し時は土嚢によって遺構を保護したうえで重機で山砂を投入した。

その後、平成25年1月16日付けで「指定文化財現状変更終了報告書」を金沢市教育委員会に提出した。

### 発掘調査日誌

- 11月19日(月) 作業小屋・発掘機材等搬入。
- 11月20日(火) 1区表土～0.6m深さまで掘削、近代の遺構面・礎石検出。2区アスファルト撤去。
- 11月21日(水) 1区で近代の遺構検出、写真撮影→エレベーション図作成→下層掘削。2区表土～0.7m深さまで掘削。石積みを検出。
- 11月22日(木) 1区で石列①(=石垣1)検出。廃土搬出。
- 11月27日(火) 1区で石列③(=石列。石垣1の裏込め)、2区で石列②(=石垣5)検出→写真撮影。午後、埋蔵文化財調査委員会の視察を受ける。
- 11月28日(水) 近代遺構の平面図、エレベーション図作成。
- 11月30日(金) 1区の近代遺構を撤去、掘り下げ。1区西半で石列④(=石垣1)検出。2区東辺を拡張。
- 12月03日(月) 廃土搬出。
- 12月05日(水) 1区石列③・④の裏込め掘削。2区石列⑥(=石垣4)検出、石列②・⑥の裏込め掘削。
- 12月10日(月) 職員のみで除雪。写真測量について現地で打ち合わせ。
- 12月11日(火) 調査区周辺、石垣3のそうじ、石列②と⑥の間を掘削、石列③の検出状況を写真撮影。
- 12月12日(水) グリッド杭設置。石垣エレベーション図測量。石垣⑥立面の写真撮影。
- 12月13日(木) 1区西拡張、石列⑤(=石垣3)検出。1区南を拡張、石列④の続きを検出。2区西を拡張、写真撮影。石列②・③立面図、1区南拡張区の平面図作成。

- 12月14日(金) 調査区内そうじ→写真測量。
- 12月17日(月) 石列②・④・⑥立面図の修正。調査区壁の写真撮影→断面図作成。2区南壁の焼土を掘削。新聞社の取材、歴史建造物整備課から情報提供の依頼を受ける。
- 12月18日(火) 断面計測点を平面図に落とす。埋め戻し・撤収について打ち合わせ。作業小屋内の道具を撤収。
- 12月19日(水) 作業小屋等の撤収。廃棄物運搬。雪かき後、石垣立面図への注記。調査区壁の断面作成。手作業道具類の撤収。
- 12月20日(木) 調査区埋め戻し。敷地境の柵復旧。発掘機材の撤収。

## 広報等

現地調査終了間際に「発掘調査の概要」の情報を金沢市市政記者室に提供し、調査終了後、金沢市役所の公式フェイスブックに記事を載せた。ただしこのときは出土遺物の整理を行っていなかったため、石垣の年代や復元流路は、この報告書と異なっている。

また調査日誌にもあるように、取材を受け、平成24年12月22日付け北國新聞朝刊に「東内惣構、徐々に宅地化」と題して紹介された。

## 指導委員会等

発掘調査終了後、遺構の評価について文化庁の佐藤 正知主任文化財調査官および金沢市埋蔵文化財調査委員会に意見を頂いた。

遺構の保存と整備工事との兼ね合いを鑑み、下記の委員会において有識者（敬称略、50音順）に意見を求めた。特に惣構・まちなか用水検討会では、考古学以外の専門家から、調査成果と復元整備案について有益な所見をいただいた。また、整備方針について前述の佐藤氏に意見をいただいた。

平成25年9月25日 惣構・まちなか用水検討部会

(アドバイザー：新谷 洋二、部会長：北浦 勝、委員：池本 敏和 宇佐美 孝 榎田 真也  
北野 博司 櫻井 敏雄 玉井 信行 竺 覚暁 増田 達男)

同年11月15日 金沢市用水保全審議会

(委員長：北浦 勝、委員：池本 良子 越島 正喜 西野 茂 馬場先 恵子 宮田 正弘  
森田 郁代 柳 正市 山 孝司 横山 方子 吉岡 裕次 吉田 隆夫)

同年11月20日 金沢市文化財保護審議会

(委員長：竺 覚暁、委員：梅田 和秀 太田 昌子 北 春千代 北野 博司 木下 栄一郎  
東四柳 史明 村上 貢 谷内尾 晋司 山崎 達文)

同年12月20日 金沢市景観審議会(用水みちすじ部会)

(部会長：黒川 威人、委員：宇佐美 孝 笠井 順二 小林 史彦 坂戸 正治 坂本 英之  
桜井 紘一 竹村 裕樹 田中 正機 南保 洋 馬場先 恵子 宮崎 俊之 向田 満  
吉岡 裕次)

## 遺物整理から報告書刊行

平成25年度に、金沢市埋蔵文化財センター直営の作業員によって、遺物の洗浄、記名、復元、実測、トレースを行った。また同年度に報告書の執筆・編集を行った。これらの費用の大部分は、金沢市歴史建造物整備課が負担した。

## 第3章 調査の報告

### 第1節 調査区の概要

調査対象地は、平成18年度に発掘した枯木橋北地点から橋場交差点を挟んで60m南にある。第3・4図にみるように、惣構が鋭く屈曲する地点にあたるのが予想された。そこに東西トレンチ2本を設定し、北側を1区、南側を2区とした。さらに1区の南側に拡張トレンチを南北方向に設定した。

調査の結果、江戸時代の惣構跡、近代の礎石1箇所、配石遺構1箇所を確認した。また出土した遺物を復元した結果、近世の陶磁器・瓦・土製品などが容量36ℓの遺物箱4ケース分となった。

第6・7図に江戸時代の惣構跡を、第8図に近代の遺構を示した。第7・8図のアルファベットは、第8・9図の断面・エレベーション・立面図の基点を表す。

基本層序は第8図の1区北壁、2区南壁の断面図を元に説明する。どちらも図の左側が城側であり、調査区外に現在の用水がある。層序の番号は区ごとに独立しており、たとえば1区の土層10=2区の土層10ではない。また番号の横に「埋土B」「整地層」などがあるものは、掘削中に遺物を取り上げる際に用いていた名称である。

1区は最上面の碎石と層1が現代の客土で、薄く締め固められた層2・3が近代の遺構面である。その下は調査区の中央に石垣1（現地では石列④）が積み重ねられ、石垣1より西（図の左）は堀の堆積土であり砂質土が多く、東は石垣の裏込土であり粘質土である。石垣1の上位4段の両側にみられる碎石層5・8からは、遺物は出土していない。石垣1の中位（上から5～9段）の裏込土にあたる層7には、石垣の方向に沿って石列（現地では石列③）がみられる。出土遺物から、石垣1上位の裏込土（層6）と堀の埋土（層12）は18世紀中葉から後半に埋まったものと判断した。

2区は最上面のコンクリートと砂利が現代の客土で、煉瓦や石を含む層1～3と碎石は近代の攪乱である。出土遺物から、層8は石垣5の裏込土で17世紀半ば以前、層10は堀の埋土で17半ばから後半に埋まったものと判断した。



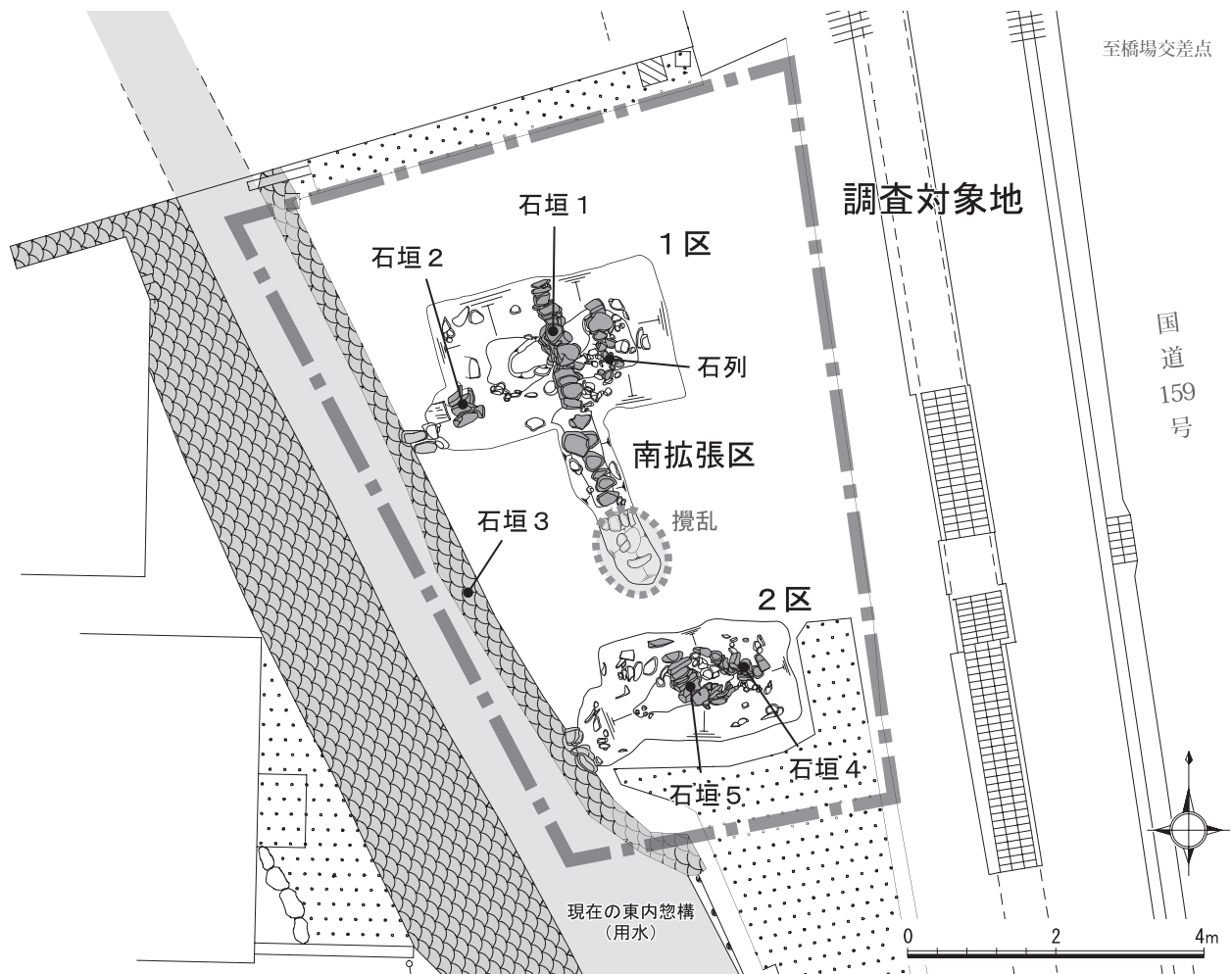
第3図 調査対象地の位置(現状図ベース)



第4図 調査対象地の位置(延宝期金沢図ベース)

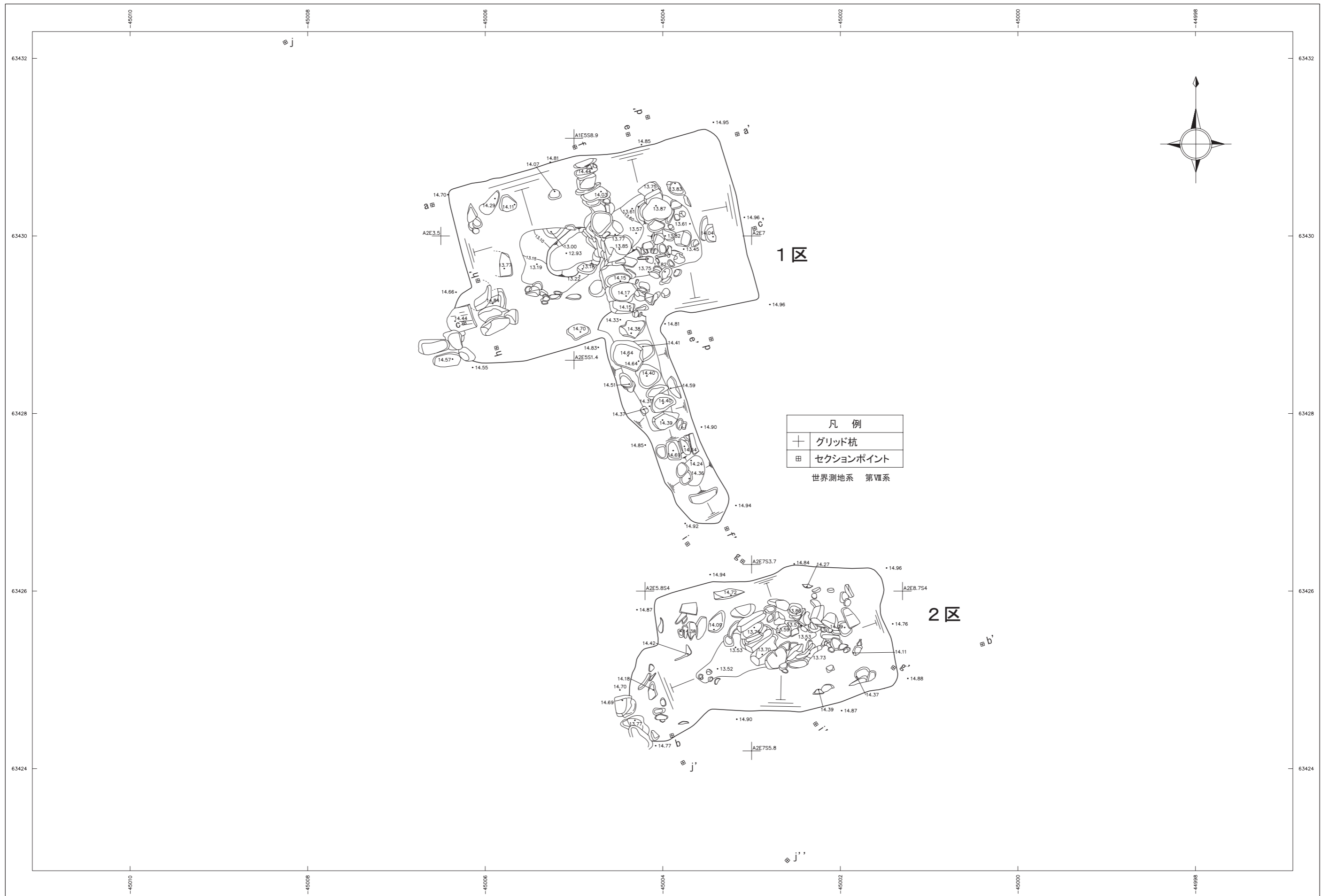


第5図 調査対象地位置図(S=1/3,000)



第6図 調査区位置図(S=1/100)

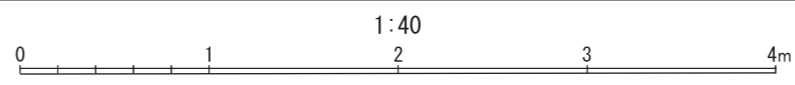
# 東内惣構跡（枯木橋南地点）遺構平面図



凡例	
+	グリッド杭
田	セクションポイント

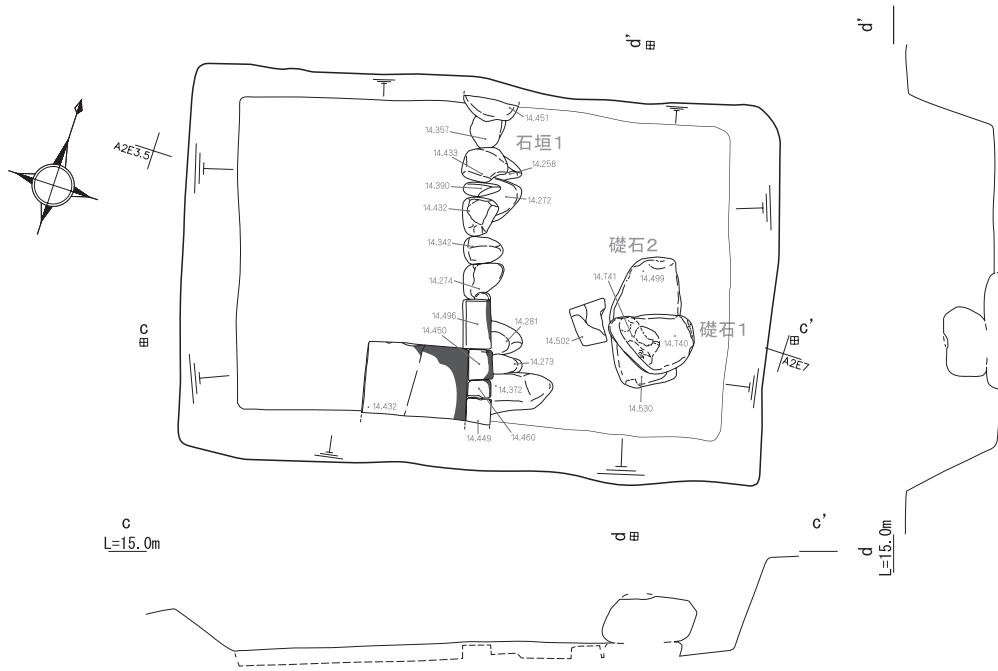
世界測地系 第七系

撮影 平成24年12月 Canon 5D  
 測図 平成25年 2月  
 座標系 測地系【世界測地系】  
 等高線間隔 5cm

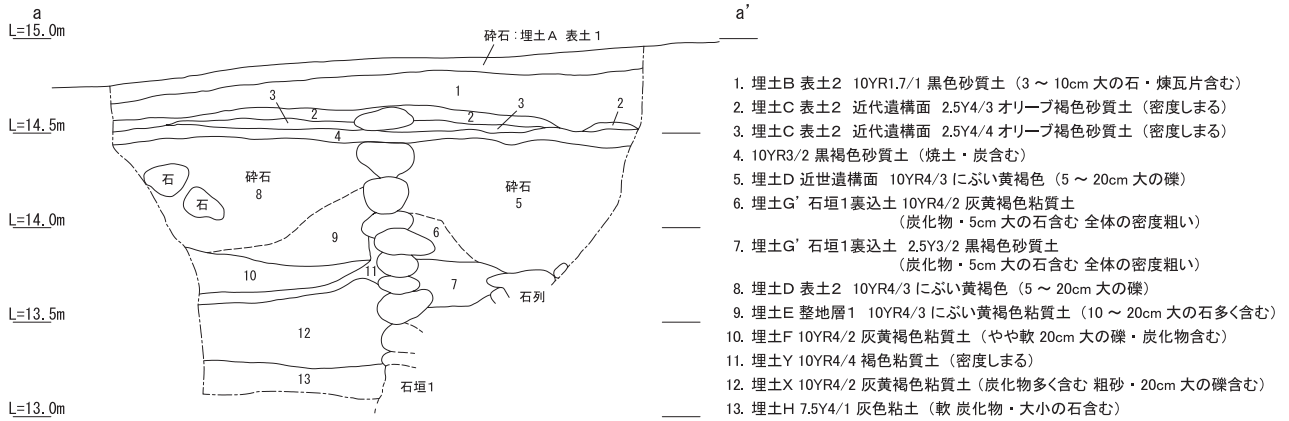


第7図 東内惣構跡（枯木橋南地点）遺構平面図(S=1/40)

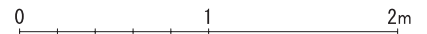
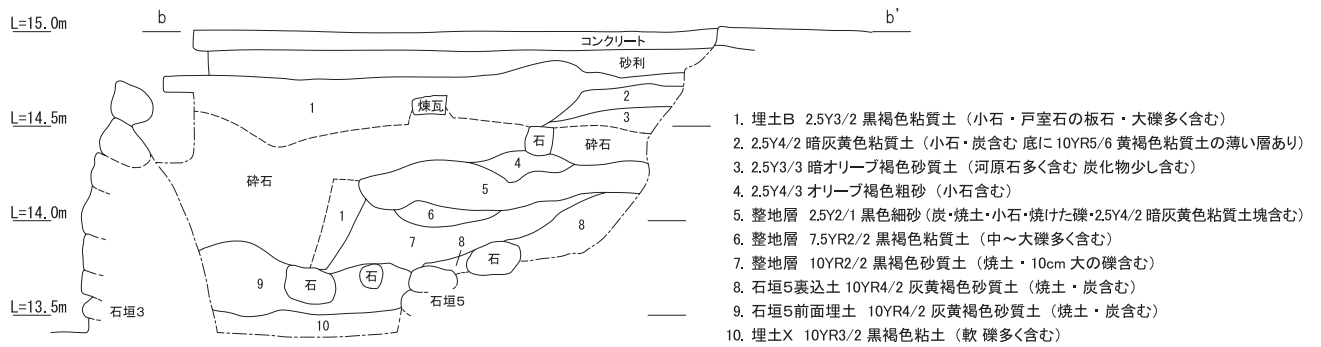
1区 上面 平面図・エレベーション図



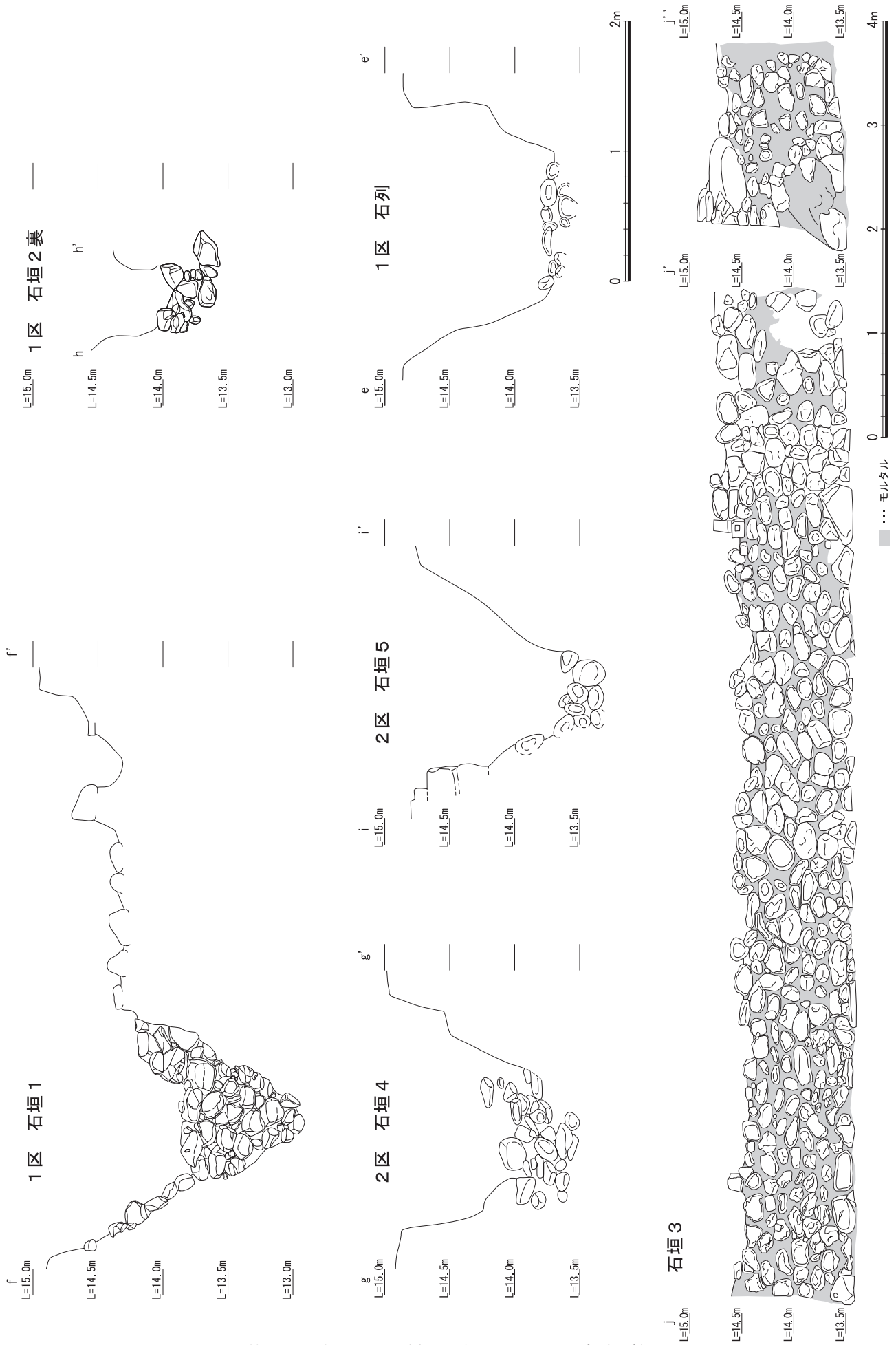
1区 北壁



2区 南壁



第8図 1区上面平面図・エレベーション図、1区北壁・2区南壁断面図(S=1/40)



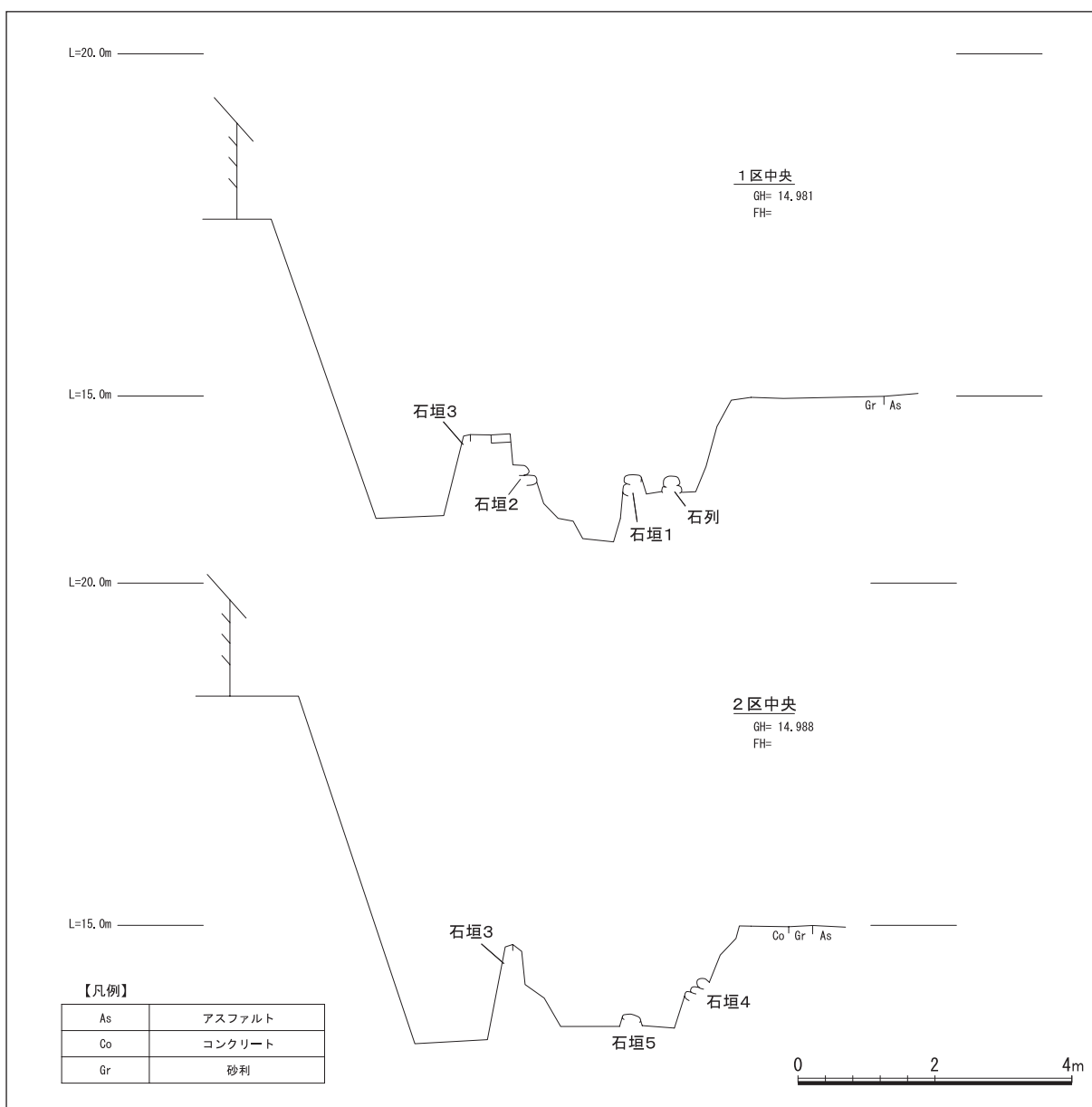
第9図 石垣1~5・石列立面図(S=1/40・1/50(石垣3))

## 第2節 遺構

### 石垣1(第7~10図)

1区を南北に横断していたため、南拡張区を設けて延長部を確認したが、南側で攪乱を受けていたため、2区の石垣との繋がりを確認できなかった。

石垣1は、3時期にわたり高さが積み増しされており、これを上位・中位・下位と呼ぶこととする。なお、石垣や堀の底については地表から深さ約190cmまでで掘削を止め、底を確認していない。土層断面をみると、石垣1前面に粗い砂や20cm大の礫を含む層10と層11を確認でき、その上の層9は石垣2の裏込土と推定される。石垣1上位の裏込土は礫が詰められた層5・6で、裏込土出土遺物から、下位が17世紀後半以前(第1段階)、中位が17世紀後半(第2段階)、上位が18世紀後半(第3段階)に造成されたと判断した。石垣は川原石を使用した乱積みで、石の広い面を上下に積み重ね、大きさは個体差があり、概ね長辺約11~16cm、短辺約5~9cmの規模のものが使用されている。石積み高は、セクション位置で中位が5段29cm、上位が4段30cmを測る。



第10図 石垣エレベーション図(S=1/100)



## 石垣2(第7~10図)

調査1区において、石垣1の西側推定約1m70cmの場所に石垣2が築かれている。石垣の上部を部分的に確認したため、その全容は不明である。川原石を使用しており、裏込土出土遺物から18世紀末~19世紀初頭(第4段階)に造営されたと推定される。

## 石垣3(第7・9図)

現在の惣構堀の石垣であり、石垣2よりさらに約1m西側に位置する。川原石を使用した乱積みで、石積み高はセクション断面で8段約1m40cmを測る。当初の堀は石垣1から幅約3m60cmあったものが、最終的には90cmほどに幅を狭めたこととなる。

## 石垣4(第7~10図)

2区で検出した。石垣は東側へ直線的に屈曲する。石は川原石を使用しており、打ち欠かれた小口面を表とする。裏込土から時期が降る遺物が1点出土しているが、1区石垣1の第1段階に対応し、その延長部と判断したい。

## 石垣5(第7~10図)

2区で検出した。石垣4の前面に築かれており、東側へ弧を描いて屈曲させるためか、川原石の狭い面を上下に積んでいる。裏込土より17世紀~18世紀末の遺物が出土しており、1区石垣1の第2段階に対応し、その延長部と推定される。

## 礎石(第8図)

惣構が狭められた後、近代に入り礎石が上下二段の状態に1箇所検出されている。建物の礎石と推定されるが、調査区が狭く関連する遺構を確認できない。石は川原石で、下段の礎石2が長辺約70cm・短辺約40cm、上段の礎石1が長辺約40cm・短辺約30cmを測る。

## 配石遺構(第8図)

礎石から南西60cmの地点に、煉瓦状に切り出した凝灰岩を南北方向に4個並べ、それに接して東西52cm、南北38cm以上の凝灰岩を敷いたものがあった。これらの石はともに厚さ20cmほどで天井面の高さを揃え、天井部の西端が火を受けている。炊事や鍛冶などの作業を行った場所であろうか。

## 第3節 遺物

### 1区 表土出土(第11図1~8)

遺物は現代の建物整地層(砂利層)下から近代遺構面を被覆していた地層で出土した。1は瀬戸産かと考えられる磁器の丸形の碗で、2単位の銅板転写による細密な図柄が外面に見られる。裏銘「嘉」がある。時期は近代に属する。2は産地不明の磁器鉢で、外面に「葉・枝」が吹絵技法により描かれ、更に「実」を重ね描く。漆継されている。3は九谷産かと考えられる磁器皿で、被熱している。4は瀬戸産かと考えられる小杯で、外面に文字「支」がある。5は近代以降の磁器製「表札」である。6はいぶし瓦で、内面に布目痕が見られる。8は鉤形を呈する鉄製品である。

### 1区 石垣1裏込土出土(第11図9~20)

9は肥前産磁器の筒丸形の碗で、17世紀後半に属する。10は肥前産磁器の丸形の碗で、11と同一個体である。時期は17世紀後半に属する。12は肥前産磁器皿で、見込みに「柳文」が描かれる。時期は1640年代~50年代(初期伊万里)に属する。13は備前産かと思われる瓶。時期は1630年代~40年代に属する。14は越前産播鉢。時期は17世紀前半に属する。15は仕上げ砥石。16は在地産の土人形(男性坐像)。時期は18世紀後半以降と考えられる。17はいぶし瓦の平瓦。18は鉄錆釉塗布の棧瓦。19は鞆の羽口、20は鉄滓。これらの金属加工関連遺物から周辺に鋳物職人の存在が想定される。地層

の時期は陶磁器類の特徴では17世紀前半～17世紀末と時期幅がある。

### 1区 整地層1(層9)出土(第12図21～27)

整地層1は石垣2の裏込(層8)直上の土層で、ここから出土した遺物をまとめた。21は瀬戸産かと考えられる磁器で猪口か。22は京・信楽産の餌猪口。23は産地不明の陶器の急須蓋。天井部外面に印刻による文様が8単位あり。24は平瓦で、いぶし瓦。25は袖瓦。26・27は新寛永の寛永通宝、18世紀初頭に初鑄。地層の時期は瀬戸産磁器と京・信楽産の陶器から19世紀前半と考えられる。

### 1区 埋土F(層8)出土(第12図28～34)

埋土F(層8)は石垣2の裏込で、ここから出土した遺物をまとめた。28は肥前産磁器の腰張形の碗である。時期は18世紀前半に属する。29は肥前産磁器碗で、高台内に一重圏線がめぐり、裏銘に「□製」が見られる。時期は17世紀後半に属する。30は産地不明の陶器瓶で、底部は糸切りである。31は肥前産陶器のいわゆる「刷毛目唐津」の鉢。見込みと高台に砂が付着。時期は18世紀中頃に属する。32は肥前産陶器のいわゆる「呉器手」の碗。豊付きに匏削りが見られる。時期は17世紀後半～18世紀前半に属する。33は在地産の小型の土師器皿。内面に凹線が入る。時期は18世紀末～19世紀初期に属する。34は硯。地層の時期は18世紀末～19世紀初頭を下限とする。

### 1区 埋土X(層12)出土(第12図35～39)

埋土X(層12)は石垣1中位の埋土で、ここから出土した遺物をまとめた。35は肥前産磁器の杉形の碗。外面は青磁釉、内面に四方襷文が見られる。時期は18世紀中頃～後半に属する。36は肥前産磁器皿。見込みに蛇目釉剥ぎが見られる。時期は18世紀後半に属する。37は越前産陶器甕の底部である。38はいぶし瓦の平瓦である。39は「丸に三つ巴」の泥面子。地層の時期は陶磁器類の特徴から18世紀後を下限とする。

### 1区 埋土H(層13)出土(第12図40～43)

埋土H(層13)は石垣1下位の埋土で、ここから出土した遺物をまとめた。40は肥前産磁器の鉢である。見込みに花唐草文様が見られる。時期は1640年～1650年代に属する。41は瀬戸産磁器蓋で小碗用か。時期不明。42は産地不明の陶器の甕。43は中砥石。地層の時期は17世紀中頃か。

### 2区 表土出土(第13図44～50)

44は肥前産磁器の小広東形の碗。線描きによる梵字文様が見られる。時期は18世紀末～19世紀前半に属する。45は肥前産かと考えられる磁器の色絵の蓋物。線描きの文様が見られる。46は産地不明の陶器の角皿。47は産地不明の磁器の蓋。48は瀬戸産かと考えられる磁器碗と思われる。見込みに笹や梅花の印刻文様がある。49は産地不明の絵の具皿。50は産地不明の陶器鍋で、蓋受けの段をもつ。外面には刷毛目による白泥文様が見られる。

### 2区 表土～石垣上面出土(第13図51～62、第14図63～65)

51は産地不明の磁器の角皿。型押技法により成形。外面に「折れ松葉」が描かれている。52は肥前かと考えられる磁器の皿。見込みに圏線が1条入る。53は産地不明の磁器の猪口か。口紅あり。54は産地不明の磁器の鉢か。貫入が入る。55は産地不明の磁器碗か。56は越前産の陶器の鉢。時期は幕末頃か。57は産地北陸系(九谷か)の陶器の甕か。58は在地産の土師質の蓋。七輪などの焚き口の蓋か。59は在地産の土師質の蓋。全体にススが付着している。60は在地産の棧瓦。黒色釉が塗彩されている。61は用途不明の石製品。ノミ痕あり。62は用途不明の留め金をもつ金属製品。63は産地が山陰系(須佐唐津か)と考えられる陶器瓶か。見込みにハマ痕1個あり。64は肥前産陶器の挿鉢。被熱している。時期は18世紀中頃～19世紀前に属する。65はスサ入りの痕跡をもつ土壁片。

## 2区 石垣5裏込(層8)出土(第14図66・67)

66は肥前産の磁器碗。被熱か。時期は17世紀後半と考えられる。67は肥前産陶器の播鉢。口縁部が「備前口」を呈する。時期は17世紀中頃に属する。地層の時期は17世紀後半を下限とする。

## 2区 石垣5前面(層9)出土(第14図68～75)

68は肥前産陶器皿で、口紅あり。時期は19世紀前半に属する。69は肥前産磁器のいわゆる「うがい茶碗」、時期は17世紀後半に属する。70は肥前産かと考えられる陶器の播鉢。口縁は外側に丸く肥厚する。時期は17世紀後半～18世紀前半に属する。71は肥前産陶器の播鉢。口縁は逆三角形を呈する。時期は17世紀前半に属する。72は在地産の平瓦、いぶし瓦。73は肥前産磁器の多角形(12角か)の皿。内面に蔓草文が見られる。74は須佐唐津産陶器の鉢、見込みに胎土目が4個見られる。時期は18世紀末に属する。75は産地不明の陶器の瓶。地層の時期は19世紀に下るものを含むが18世紀後半を下限とする。

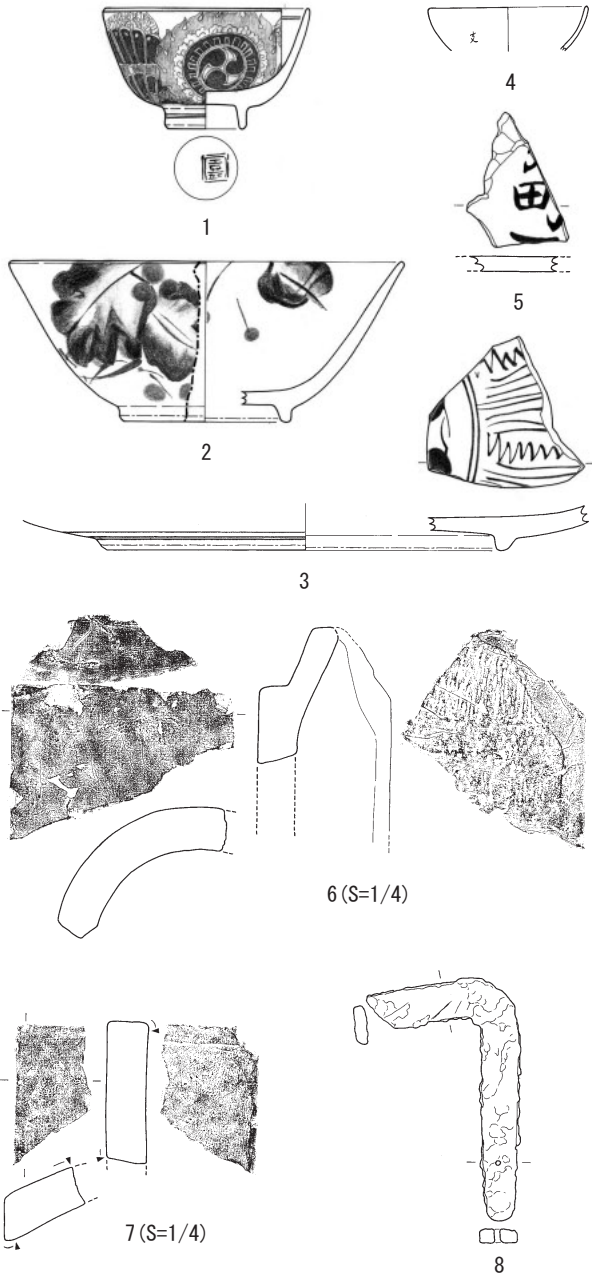
## 2区西拡張区 石垣3裏込出土(第15図76～87)

76は石板である。両面共に格子目が引かれている。時期は近代以降であろう。77は肥前産磁器の小皿。型押技法により成形。裏銘「金」がある。時期は17世紀後半～18世紀前半に属する。78は産地・器種不明の磁器。79は在地産の土師質の皿。灯心油痕2箇所以上あり。時期は17世紀後半に属する。80は内外面に黒色釉薬が塗彩された棧瓦。時期は近代以降か。81は小舞の痕跡をもつ土壁片。82は九谷産磁器の碗。色絵で口紅あり。83は産地不明の陶器の鉢。84は在地差の土師質の火鉢。三足で、外面に赤漆塗彩。時期は18世紀後半以降と考えられる。85は産地不明の陶器の甕。86は外面に黒色釉薬が塗彩された熨斗瓦。時期は近代以降か。87は用途不明(行火か)の石製品。内外面にスス付着。地層の時期は17世紀後半～18世紀後半の陶磁器類などを含むが、近代以降(明治時代)と考えられる。

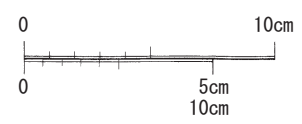
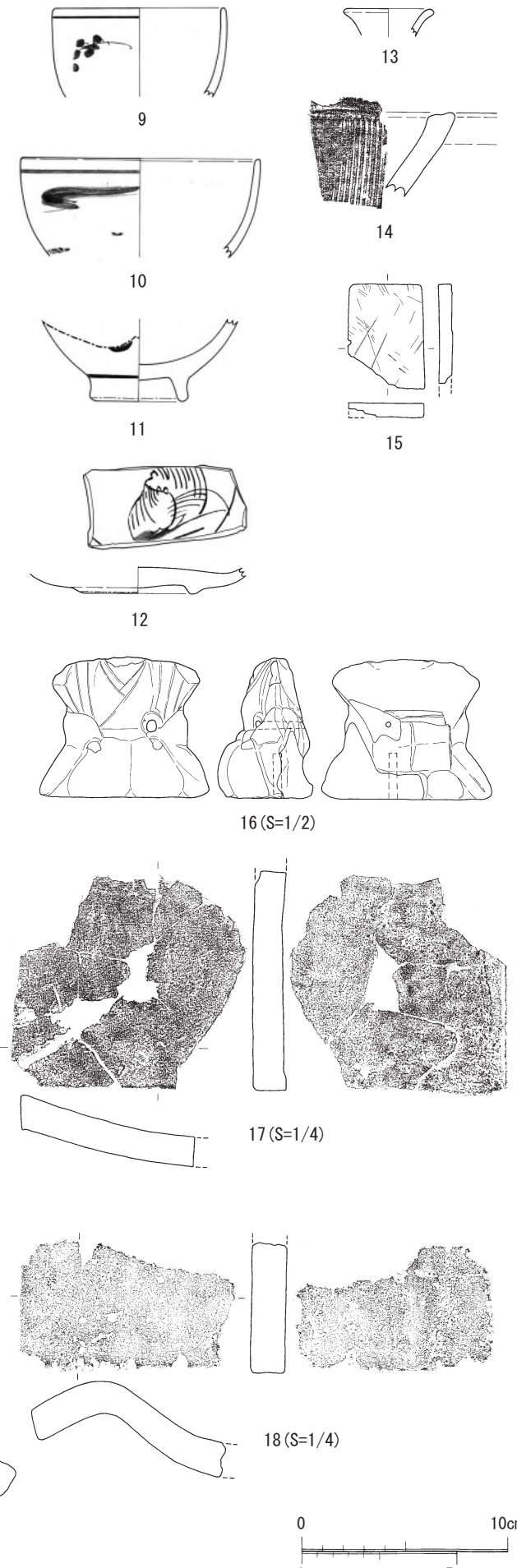
\*本節の遺物の年代観は以下の文献を参考にした。

- |         |       |                                                 |
|---------|-------|-------------------------------------------------|
| 江戸遺跡研究会 | 2001年 | 「陶磁器編年表」『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房                      |
| 木村 孝一郎  | 2004年 | 「近世越前焼における編年的研究ノート」『福井城跡IV』 福井市文化財保護センター        |
| 滝川 重徳   | 2002年 | 「第3章 遺構と遺物」『金沢市木ノ新保遺跡』 石川県教育委員会、(財)石川県埋蔵文化財センター |

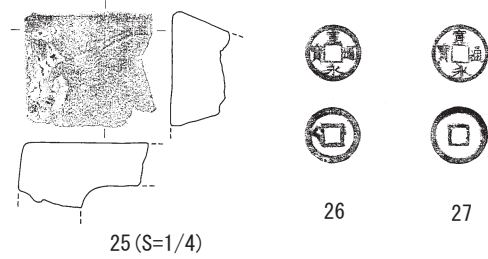
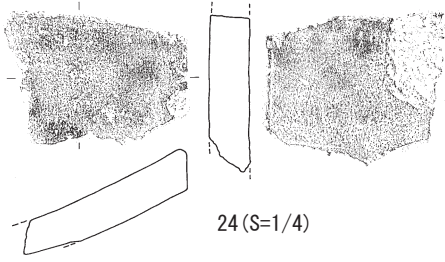
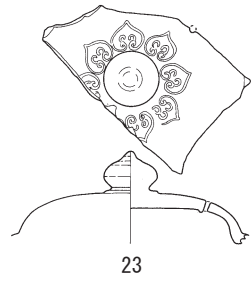
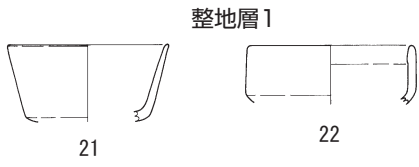
表土



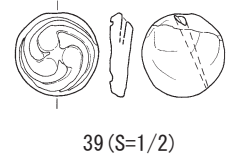
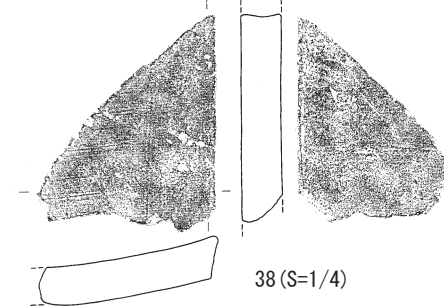
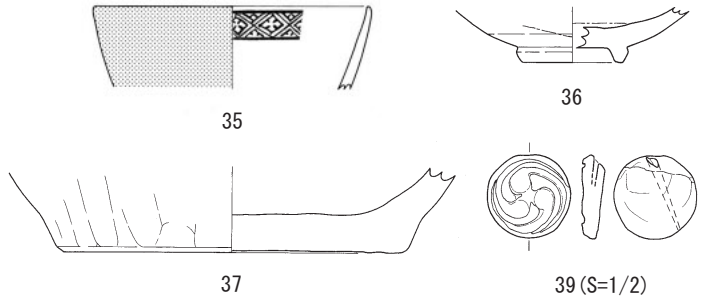
石垣1裏込土



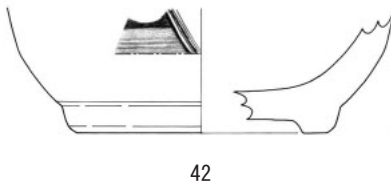
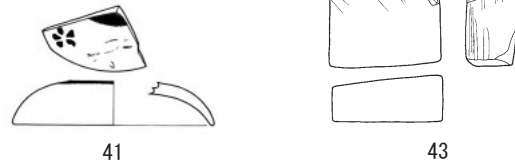
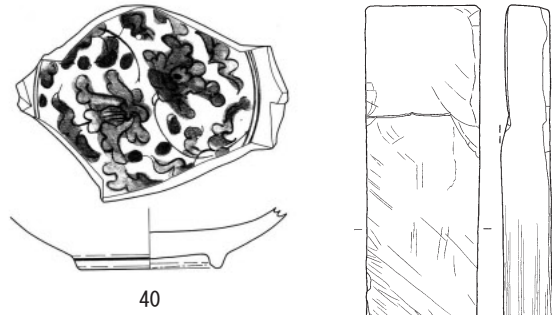
第11图 1区表土·石垣1裏込土出土遺物(S=1/2·1/3·1/4)



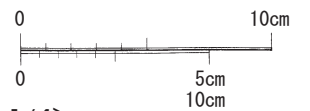
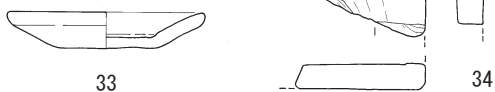
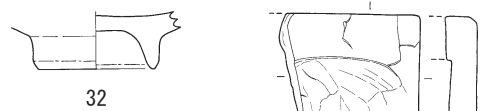
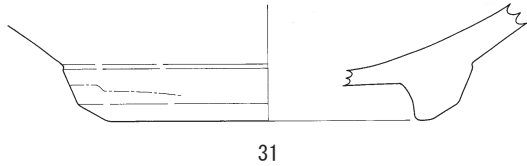
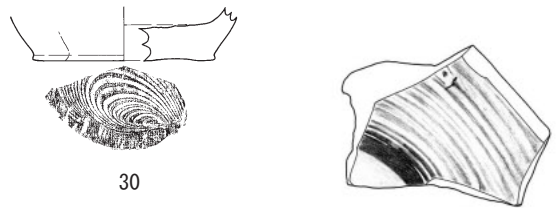
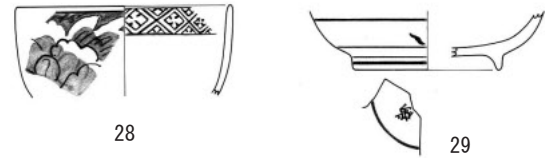
埋土X(層10)



埋土H

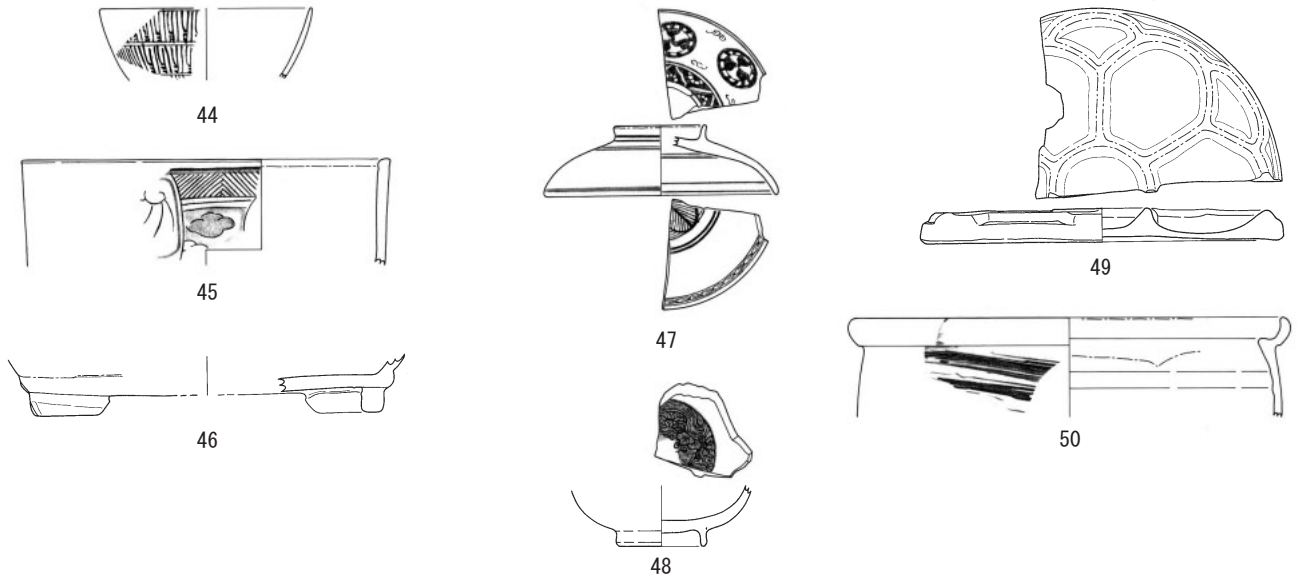


埋土F

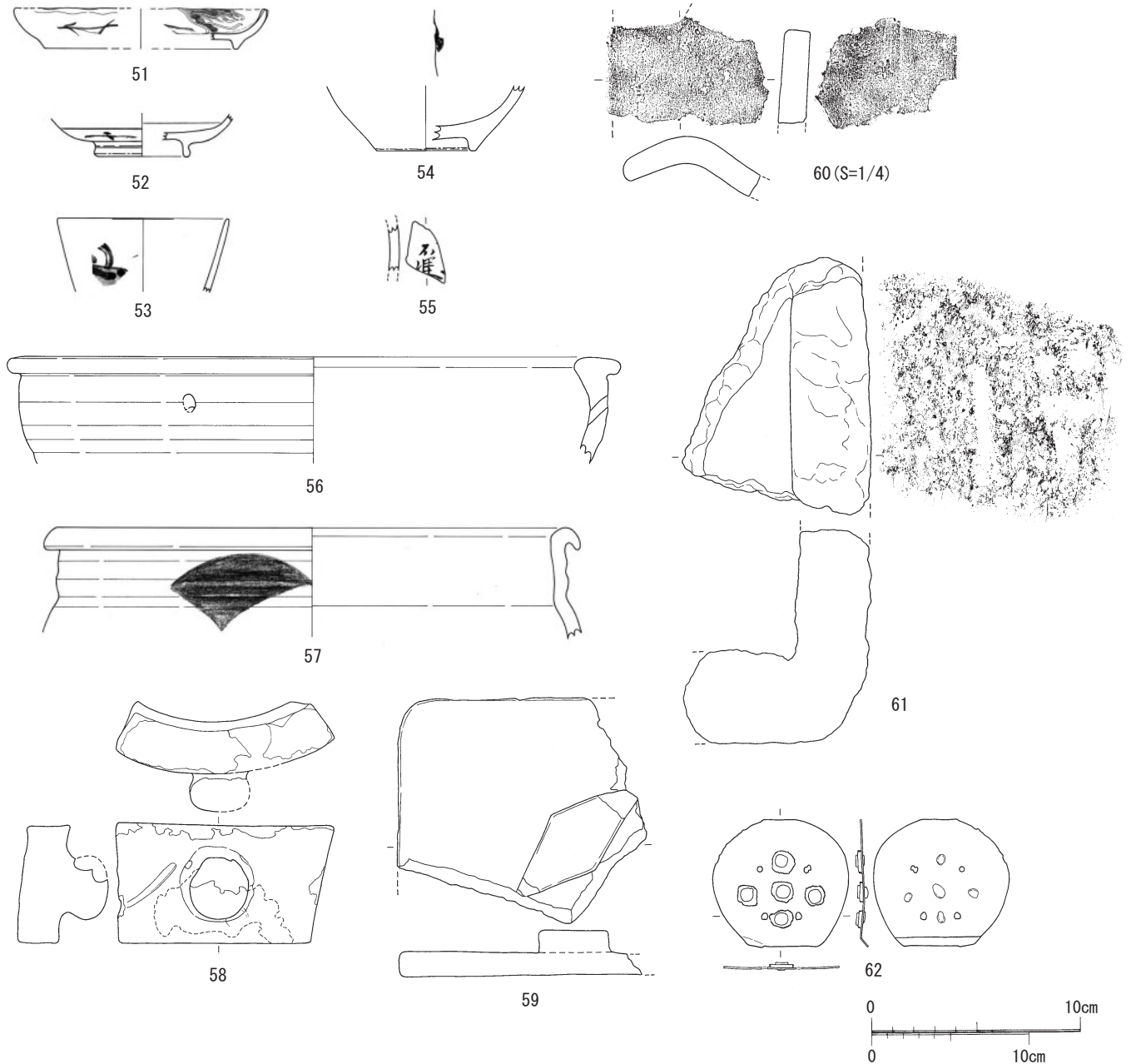


第12图 1区石垣1前面埋土(整地層1·埋土F·埋土X·埋土H)出土遺物(S=1/2·1/3·1/4)

表土

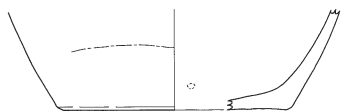


表土~石垣上面

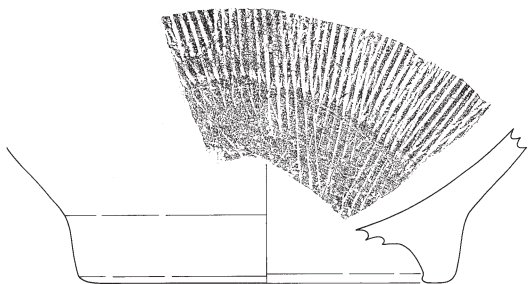


第13図 2区表土・表土~石垣上面出土遺物(S=1/3・1/4)

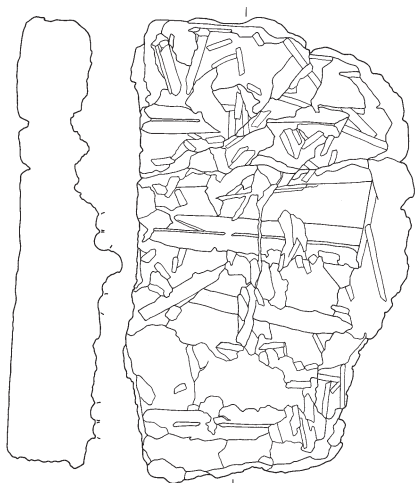
表土~石垣上面



63



64

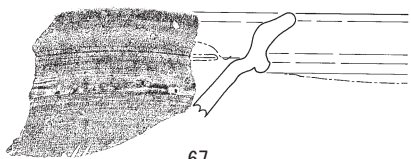


65

石垣5裏込土



66

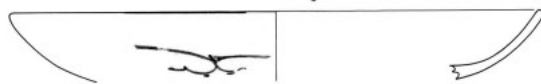


67

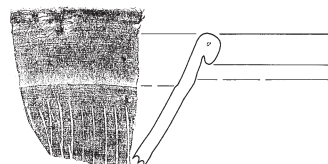
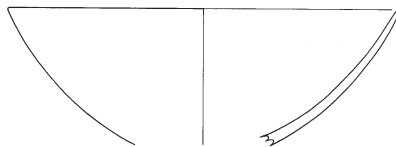
石垣5前面埋土



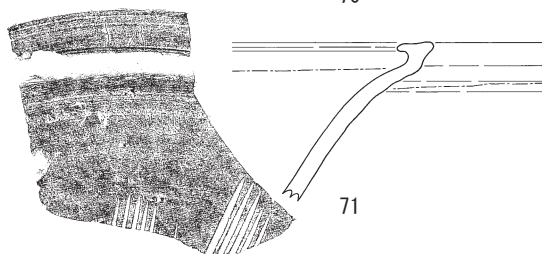
68



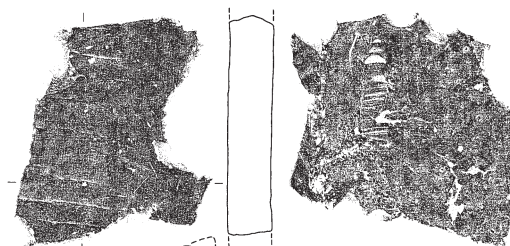
69



70



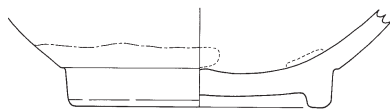
71



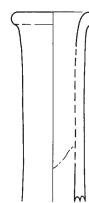
72(S=1/4)



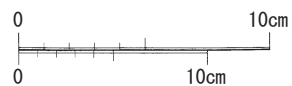
73



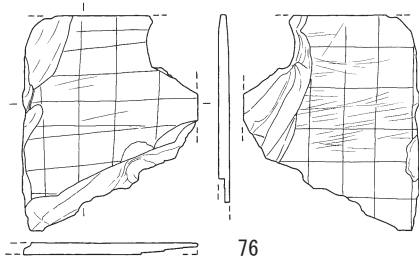
74



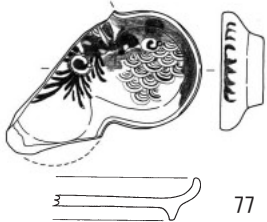
75



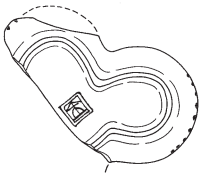
第14图 2区表土~石垣上面·石垣5裏込土·石垣5前面埋土出土遺物(S=1/3·1/4)



76



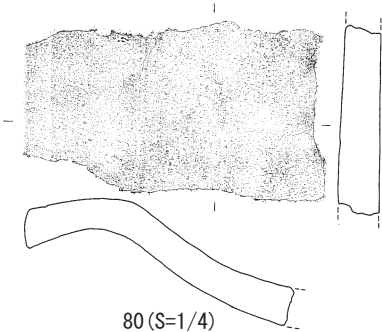
77



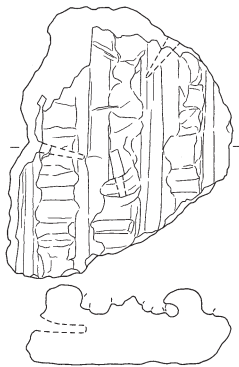
78



79



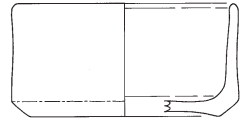
80 (S=1/4)



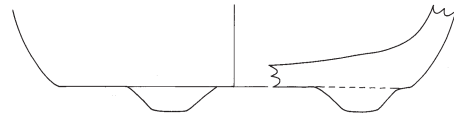
81



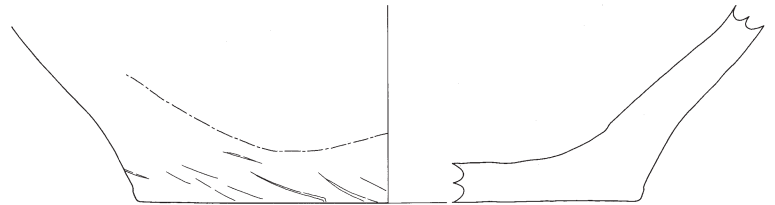
82



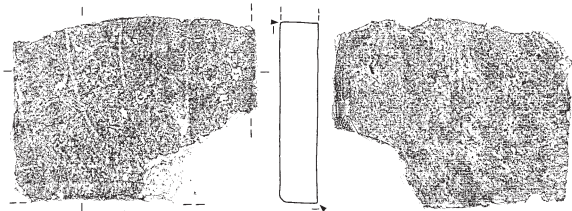
83



84



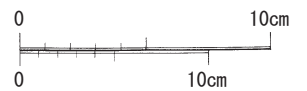
85



86 (S=1/4)



87



第15图 2区西拡張区 石垣3裏込土出土遺物(S=1/3·1/4)



第2表 遺物観察表

図版番号	番号	調査区	遺構・層位	器材種別	法量a	法量b	法量c	法量d	遺存(重量g)	釉薬(成形)	絵付	胎土色 石材	産地	備考	実測番号
11	1	1	表土	碗磁器	8.2	3.1	4.8	—	口 12/12	透明	染付	灰白	瀬戸?	銅版転写2単位	E4
11	2	1	表土	鉢磁器	15.6	6.4	6.4	—	口 6/12	透明	吹絵	灰白	不明	漆継1、畳付漆付着	E2
11	3	1	表土	皿磁器	—	15.6	1.8	—	底 1/12	透明	染付	灰白	九谷?	高台内一重圏線、被熱	E1
11	4	1	表土	小杯磁器	6.4	—	(1.8)	2.3 —	口 1/12	透明	染付上絵	灰白	瀬戸?		E8
11	5	1	表土	表札?磁器	—	(5.3)	0.6	—	—	透明	色絵	灰白	不明	「□町□」の文字	E3
11	6	1	表土	丸瓦	(11.4)	(8.8)	2.0	7.0	225g			暗灰	在地	いぶし瓦	E11
11	7	1	表土	平瓦	(8.2)	(4.7)	2.7	—	101g	黒釉薬		暗灰黄	在地		E10
11	8	1	表土	不明鉄	9.6	6.2	1.5	—	52.96g						E9
11	9	1	石垣1裏込土	碗磁器	8.42	—	(4.3)	—	口 2/12	透明	染付	灰白	肥前		E6
11	10	1	石垣1裏込土	碗磁器	11.4	—	(4.8)	—	口 1/12	透明	染付	灰白	肥前	11と同一個体	E5
11	11	1	石垣1裏込土	碗磁器	—	4.7	—	—	底 12/12	透明	染付	灰白	肥前	漆継、底部砂付着	M21
11	12	1	石垣1裏込土	皿磁器	—	5.7	—	—	底 6/12	透明	染付	灰白	肥前	高台内・見込砂付着	M20
11	13	1	石垣1裏込土	瓶陶器	4.4	—	1.4	—	口 3/12	鉄釉		灰白	備前?		M18
11	14	1	石垣1裏込土	摺鉢陶器	(30.0)	—	(41)	—	口 1/12以下	鉄泥		淡橙	越前		M17
11	15	1	石垣1裏込土	仕上げ砥石石製品	(5.0)	3.7	0.7	—	22g			流紋岩質凝灰岩			M23
11	16	1	石垣1裏込土	男性坐像土師質	(4.5)	5.4	3.0	—	51.13g	中実型あわせ		にぶい橙黄	在地	キラコ雲母、孔1	E7
11	17	1	石垣1裏込土	平瓦	(14.2)	(14.6)	2.0	—	485g			灰	在地	いぶし瓦	M25
11	18	1	石垣1裏込土	棧瓦	(8.4)	(12.5)	2.2	—	365g	鉄錆釉		暗褐	在地		E12
11	19	1	石垣1裏込土	鞆の羽口土製品	(11.3)	—	11.5	2.4	—			橙			M16
11	20	1	石垣1裏込土	鉄滓	10.4	6.2	6.4	—	300g						M24
12	21	1	整地層1(層9)	猪口?磁器	6.4	—	(3.1)	—	口 1/12	透明		白	瀬戸?	部分的に釉割がれ	E14
12	22	1	整地層1(層9)	餌猪口陶器	6.5	—	(2.3)	—	口 2/12	灰釉		浅黄橙	京・信楽		E13
12	23	1	整地層1(層9)	急須蓋陶器	—	2.1	—	(3.7)	—			赤褐色	不明	外面に印刻模様	E15
12	24	1	整地層1(層9)	平瓦	(8.3)	(10.0)	2.21	—	189g			灰	在地	いぶし瓦	E16
12	25	1	整地層1(層9)	袖瓦	(6.8)	(6.0)	2.2	—	145g	黒釉薬		褐色	在地		E18
12	26	1	整地層1(層9)	寛永通宝	2.28	2.29	0.59	0.59	3.13g					e=0.15cm 新寛永	E27
12	27	1	整地層1(層9)	寛永通宝	2.35	2.32	0.65	0.61	2.19g					e=0.12cm 新寛永	E26
12	28	1	埋土F(層12)	碗磁器	8.4	—	3.6	—	口 1/12	透明	染付	白	肥前		M4
12	29	1	埋土F(層12)	碗磁器	—	5.9	2.3	—	底 1/12以下	透明	染付	白	肥前	高台内1重圏線裏銘判読できず	M5
12	30	1	埋土F(層12)	瓶陶器	—	7.2	(2.2)	—	底 3/12	鉄釉		灰白	不明	底部糸切り	M2
12	31	1	埋土F(層12)	鉢陶器	—	15.2	—	—	底 2/12	鉄釉白泥		にぶい赤褐色	肥前	見込・高台内砂付着	M3
12	32	1	埋土F(層12)	碗陶器	—	4.6	(2.3)	—	底 12/12	灰釉		浅黄橙	肥前	畳付鉋削り	M1
12	33	1	埋土F(層12)	土師器皿土器	7.8	3.2	1.4	—	口 3/12			浅黄橙	在地	外面ナデ、内面凹線	M7
12	34	1	埋土F(層12)	硯石製品	(6.1)	(5.6)	1.3	—	65g			粘板岩			M6
12	35	1	埋土X(層10)	碗磁器	10.8	—	3.3	—	口 1/12以下	内面・透明外面・青磁釉	染付	白	肥前		M15
12	36	1	埋土X(層10)	皿磁器	—	4.4	—	—	底 3/12			灰白	肥前	見込蛇目釉剥	M14
12	37	1	埋土X(層10)	甕陶器	—	13.4	3.4	—	底 3/12	鉄泥		橙	越前		M12
12	38	1	埋土X(層10)	平瓦	(11.0)	(9.6)	2.0	—	190g			灰白	在地	いぶし瓦	M13
12	39	1	埋土X(層10)	泥面子土師質	2.2	—	0.6	—	2.41g	中実型あわせ			在地	キラコ雲母、孔1	Q27
12	40	1	埋土H(層13)	鉢磁器	—	5.7	—	—	底 12/12	透明	染付	白	肥前	高台に砂付着	M8
12	41	1	埋土H(層13)	蓋磁器	8.0	—	—	—	口 2/12	透明	色絵(朱・黒・茶)	白	瀬戸		M11
12	42	1	埋土H(層13)	甕陶器	—	10.6	(5.0)	—	底 2/12	白泥		灰	不明		M10
12	43	1	埋土H(層13)	中砥石石製品	15.8	4.5	2.0	—	250g			流紋岩質凝灰岩			M9
13	44	2	表土	碗磁器	(8.4)	—	2.8	—	口 1/12以下	透明	染付	白	肥前	小広東形	Q14
13	45	2	表土	蓋物磁器	14.6	—	—	—	口 1/12以下	透明釉	色絵(赤・黒・緑)	白	肥前?		Q24
13	46	2	表土	角皿陶器	—	—	—	—	—		外面：鉄釉内面：銅緑釉	にぶい橙	不明		Q15

図版番号	番号	調査区	遺構・層位	器材種 質	法量a	法量b	法量c	法量d	遺存 (重量g)	釉薬 (成形)	絵付	胎土色 石材	産地	備考	実測 番号
13	47	2	表土	蓋 磁器	9.3	3.2	2.8	—	口 1/12	透明	染付	白	不明		Q7
13	48	2	表土	碗 磁器	—	3.4	2.4	—	底 2/12	透明	染付	白	瀬戸?	見込印刻	Q8
13	49	2	表土	絵の具皿 磁器	4.2	—	1.3	—	口 4/12	透明		白	不明		Q11
13	50	2	表土	鍋 陶器	17.6	—	4.0	—	口 1/12以下	灰釉	白泥	にぶい 黄橙	不明		Q10
13	51	2	表土～ 石垣上面	角皿 磁器	—	1.9	—	—	底 9/12	透明	染付	白	不明	型押し、置付き 砂付着	Q19
13	52	2	表土～ 石垣上面	皿 磁器	—	4.3	(2.0)	—	底 2/12	透明	染付	白	肥前?	見込圏線1条	E28
13	53	2	表土～ 石垣上面	猪口? 磁器	8.2	—	—	—	口 1/12	透明	染付	灰白	不明	口紅	Q17
13	54	2	表土～ 石垣上面	鉢 磁器	—	4.7	3.1	—	底 4/12	透明	染付	灰白	不明	貫入あり	Q16
13	55	2	表土～ 石垣上面	碗? 磁器	—	—	—	—	—	透明	染付	白	不明	内外面施釉	Q18
13	56	2	表土～ 石垣上面	鉢 陶器	27.4	—	(5.1)	—	口 1/12	鉄泥		黄灰	越前	孔径0.5mm	E22
13	57	2	表土～ 石垣上面	甕 陶器	24.6	—	(5.2)	—	口 1/12	灰釉 鉄釉		灰	北陸系		E23
13	58	2	表土～ 石垣上面	蓋 土器	10.4	5.75		4.1	完形			浅黄橙	在地	e=2.8	Q20
13	59	2	表土～ 石垣上面	蓋 土器	10.7	(11.5)	2.2	—	—			明赤褐	在地	スス付着、雲 母・赤色粒あり	E24
13	60	2	表土～ 石垣上面	棧瓦	(5.9)	(6.7)	1.7	—	135g	黒釉薬		明赤褐	在地		E25
13	61	2	表土～ 石垣上面	不明 石製品	(12.3)	(9.0)	(10.2)	—	582g			軽石 凝灰岩		ノミ痕あり	E30
13	62	2	表土～ 石垣上面	不明 金属製品	6.0	6.45	0.05	—	18.29g					留金4、孔4	Q22
14	63	2	表土～ 石垣上面	瓶? 陶器	—	9.3	—	—	底 2/12	灰釉		淡黄	山陰系?	見込みハマ痕1	Q9
14	64	2	表土～ 石垣上面	播鉢 陶器	—	14.9	6.1	—	底 3/12			橙	肥前	被熱	Q25
14	65	2	表土～ 石垣上面	土壁片	(18.5)	(11.4)	4.1	—	—			橙	在地		Q26
14	66	2	石垣5 裏込土	碗 磁器	13.2	—	1.0	—	口 1/12	透明	染付	灰白	肥前	被熱?	Q21
14	67	2	石垣5 裏込土	播鉢 陶器	28.0	—	4.1	—	口 1/12以下	鉄釉		赤	肥前		Q1
14	68	2	石垣5 前面埋土	皿 磁器	21.2	—	2.8	—	口 1/12以下	透明	染付	灰白	肥前	口紅	Q5
14	69	2	石垣5 前面埋土	碗 磁器	15.6	—	5.4	—	口 1/12	透明		白	肥前	うがい茶碗	Q4
14	70	2	石垣5 前面埋土	播鉢 陶器	(31.2)	—	—	—	口 1/12	鉄釉		明赤褐	肥前?		Q2
14	71	2	石垣5 前面埋土	播鉢 陶器	(31.8)	—	6.3	—	口 1/12	鉄釉		明赤褐	肥前		Q3
14	72	2	石垣5 前面埋土	平瓦	(12.6)	(11.2)	2.3	—	375g			灰白	在地	いぶし瓦	Q6
14	73	2	石垣5 前面埋土	多角形皿 磁器	—	—	—	—	—	透明	染付	白	肥前		Q23
14	74	2	石垣5 前面埋土	鉢 陶器	—	10.4	3.9	—	底 12/12	長石釉?		淡黄	須佐唐津	見込胎土目4	Q13
14	75	2	石垣5 前面埋土	瓶 陶器	3.3	—	(7.5)	—	口 12/12	鉄釉			不明		Q12
15	76	2	石垣3 裏込土	石板 石製品	(8.6)	(6.9)	4.45	—	40g			暗灰		両面に格子目	M32
15	77	2	石垣3 裏込土	小皿 磁器	—	—	1.7	—	—	透明	染付	白	肥前	型押し、裏銘 「金」か	M27
15	78	2	石垣3 裏込土	不明 磁器	—	—	—	—	胴 2/12	透明	染付	灰白	不明		E20
15	79	2	石垣3 裏込土	土師器皿 土器	9.2	3.4	1.6	—	口 2/12			明黄橙	在地	灯心油痕2以上	E19
15	80	2	石垣3 裏込土	棧瓦	(14.2)	(10.0)	2.0	—	410g	黒釉薬		赤褐色	在地		E21
15	81	2	石垣3 裏込土	土壁片	(10.7)	(9.1)	3.1	—	—			橙	在地		E29
15	82	2	石垣3 裏込土	碗 磁器	11.2	—	4.8	—	口 3/12	透明	染付 色絵	白	九谷	口紅	E35
15	83	2	石垣3 裏込土	鉢 陶器	9.0	7.4	4.5	—	底 6/12	灰釉		灰白	不明		E34
15	84	2	石垣3 裏込土	火鉢 土器	—	14.0	—	—	底 2/12			浅黄橙	在地	外面赤漆、三足	M28
15	85	2	石垣3 裏込土	甕 陶器	—	20.0	(7.8)	—	底 2/12	鉄泥		橙	不明		M30
15	86	2	石垣3 裏込土	熨斗瓦	(10.4)	(12.8)	2.0	—	340g	黒釉薬		赤	在地		M29
15	87	2	石垣3 裏込土	不明 石製品	(24.6)	(14.2)	(11.7)	—	1740g			軽石 凝灰岩	在地	スス付着	E32

## 第4章 総括

東内惣構跡では平成18年度に、橋に面した枯木橋北地点（以下「北地点」）を発掘調査している。今回は枯木橋から南へ約50mの地点（以下「南地点」）を発掘調査しており、両地点の調査成果を比較・検討することで、総括に代えたい。

北地点では惣構堀の石垣による段階的縮小が確認されており、報告によればⅠ期は惣構造営期である16世紀末～17世紀、Ⅱ期は石垣①が築かれる18世紀代、Ⅲ期は石垣②が築かれる19世紀前半、Ⅳ期は現在も残る石垣③が築かれる19世紀後半～明治時代に比定されている。一方、南地点では惣構造営期の遺構は不明であり、第1段階(17世紀後半以前)に石垣1の下位が、続いて第2段階(17世紀後半)に同中位が、第3段階(18世紀後半)に同上位が構築されている。北地点が18世紀代までは石垣を築かないのに対し、南地点では早くから石垣を築き段階的に積み増しを行っている。南地点第4段階(18世紀末～19世紀初)では石垣1の西側約1m70cmに石垣2が築かれているが、時期的には北地点石垣②に近く、この二つが一連の動きであった可能性もある。南地点石垣3(明治時代以降)は、北地点石垣③と同じ時期と推定される。

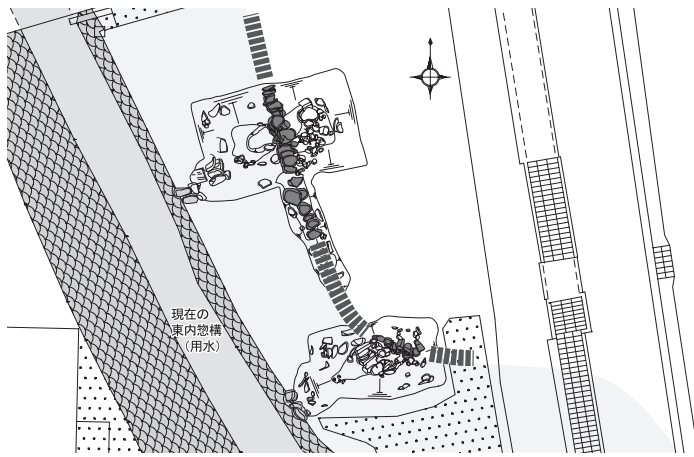
堀幅は、北地点Ⅰ期推定幅が12m前後とすると、同石垣①が堀底幅約4～5mに狭まるのに対して、南地点石垣1は3.6m以上とほぼ同規模ではあるが、石垣化により半世紀以上早く堀幅が狭められていることとなる。次いで、北地点石垣②が堀幅約2.3mとなるのに対し、南地点石垣2も堀幅約2mとほぼ同様に、時期も前者の19世紀前半に対し後者が18世紀末～19世紀初と近い。以上の南地点の変遷を模式化したものが第16図である。なお、2区において石垣が大きく東側へ屈曲するのは、西の土居側段丘が大きく迫り出していた地形的な理由によるものである。

北地点では石垣化されても土地の嵩上げは低く、建物は掛け作り構造であった。これに対し、南地点では石垣1が下位から上位へと積み増しされるように、土地が段階的に嵩上げされており、少なくとも近代における建物は礎石建ちであった。この違いは、惣構堀が浅野川に直接排水されているため、大雨による逆流水害の程度によるものではないかと考えられる。北地点の堀底の海拔高が約12mであるのに対し、南地点の海拔高は13～13.5mと約1～1.5m高く、水害にあう確率が相対的に低かったのに対し、北地点ではある程度の増水を前提に建物は掛け作り構造で対応したと推察される。

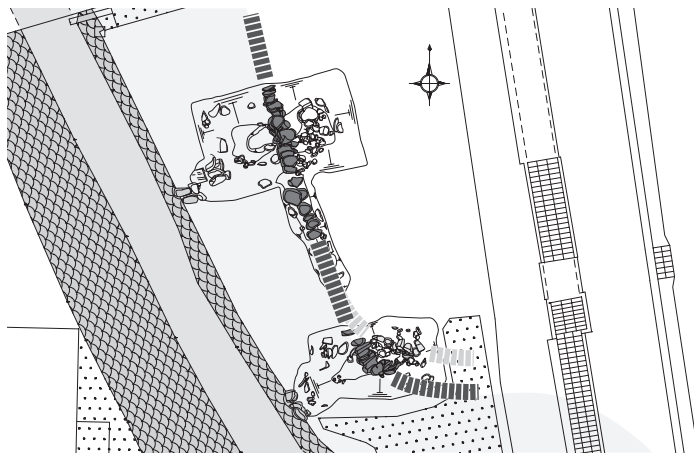
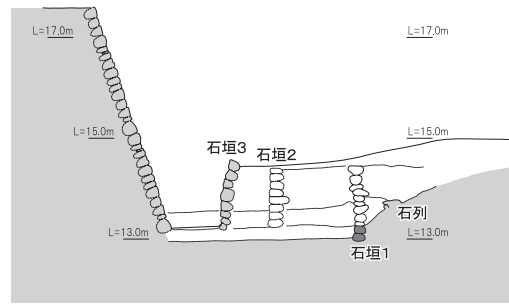
調査地点は現在では尾張町1丁目であるが、江戸時代には橋場町である。寛文7年金沢図(1667年)でみると宅地に細分化されており、文化8年(1811)『金沢町絵図』や『金沢町名帳』によると調査地点は地子地を中心とし、枯木橋詰めまでには「壘刺・岩崎屋伊右衛門」、「八百屋物・津幡屋太助」、「銭・越中屋喜右衛門」の名が見られる。北地点が接する、浅野川大橋から枯木橋を右折する北国街道は藩主の参勤交代路でもあり、道幅12m前後(草図)の大路であったのに対し、南地点が位置する枯木橋から直進する味噌蔵町への道幅は半分以下の小路であった。北地点では石垣①が築かれる以前の寛文7年には町地として利用されており、堀を埋め立てずに掛け作り構造の町家であったと推定される。これに対し、南地点でも同様に町地として利用されていることから、17世紀後半以前の石垣1下位の構築時期は少し遡る可能性も考えられ、現在に近い宅地奥行きが確保されていたこととなる。『金沢町絵図』では、枯木橋の両脇のみを石積みで描いているが、実際は発掘調査で得られたように枯木橋の両側まで堀の石垣化が段階的に行われていた。

近年の発掘調査の成果により惣構跡の様相が次第に明らかになりつつあるが、まだまだ不明な点も多く、今後の調査により研究が進むことを期待したい。

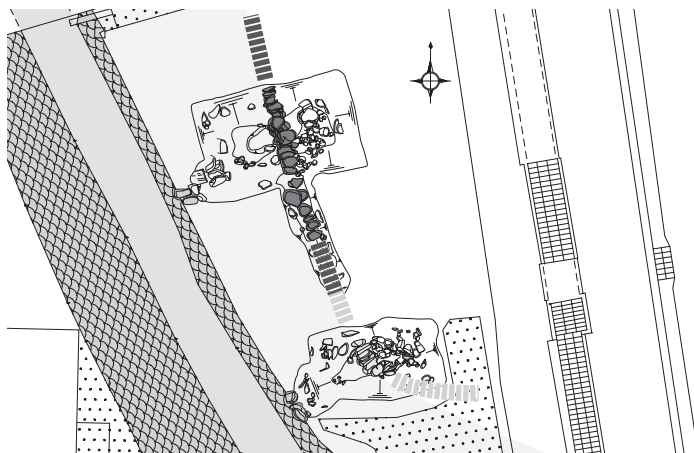
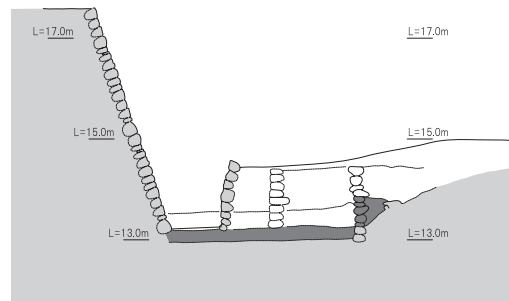
\*参考文献 金沢市玉川図書館 1997年 金沢市図書館叢書(一)『金沢町名帳』  
金沢市玉川図書館 1999年 金沢市図書館叢書(二)『金沢町絵図』  
金沢市 1999年 『金沢市史 資料編18 絵図・地図』



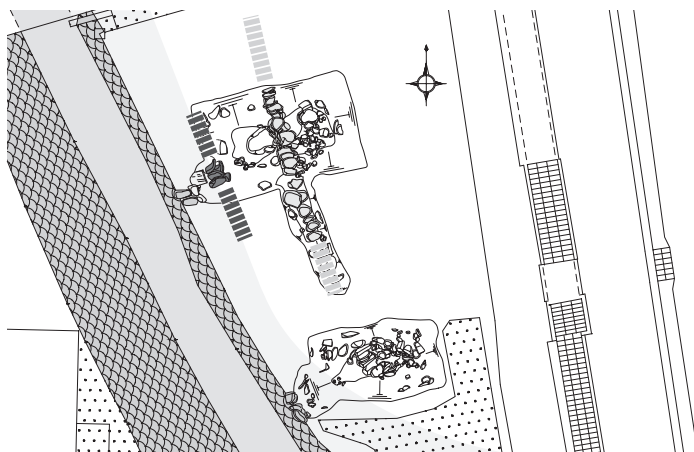
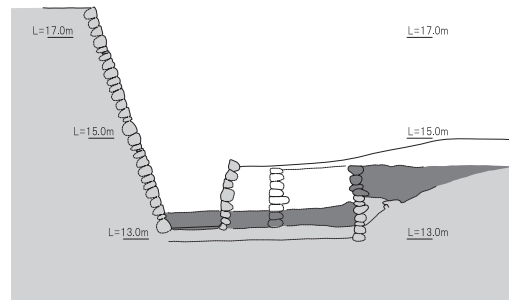
### 第1段階 (17世紀後半以前)



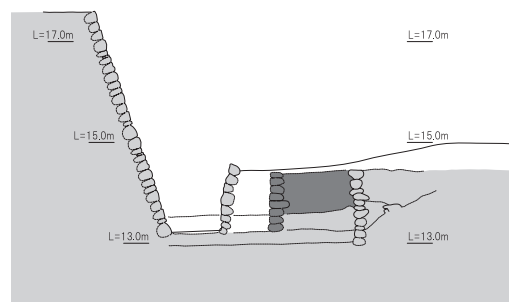
### 第2段階 (17世紀後半)



### 第3段階 (18世紀後半)



### 第4段階 (18世紀末～19世紀初)



第16図 東内惣構跡(枯木橋南地点)における惣構変遷図(S=1/150)



調査区全景 (奥: 1区 手前: 2区 左: 現在の用水 右上: 橋場交差点 南から撮影)



1区 表土掘削はじめ (南東から撮影)



1区 近代遺構 (北から撮影)



1区 石垣1 (手前: 堀の前面)・石列 (西から撮影)



1区・南拡張区 石垣1 (北から撮影)



1区 石垣2 (東から撮影)



2区 石垣5 検出状況 (東から撮影)



2区 石垣5 (東から撮影)



2区 石垣5 (西から撮影)



2区 石垣5 (奥)・石垣4 (手前) (東から撮影)



2区 石垣5 (手前)・石垣4 (奥) (西から撮影)



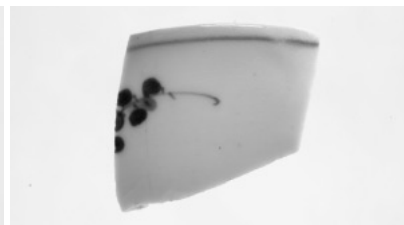
1区 北壁 (南から撮影)



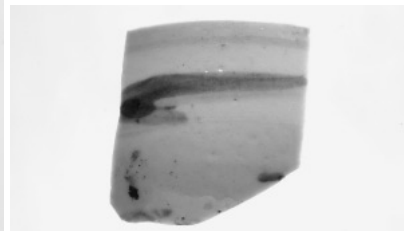
2区 南壁 (北西から撮影)



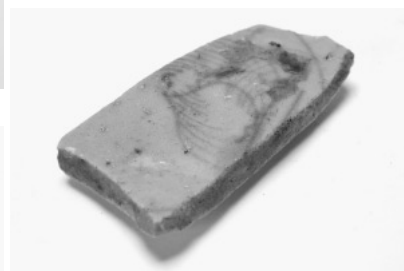
1区 表土出土遺物 (第11図1~8)



第11図9



第11図10



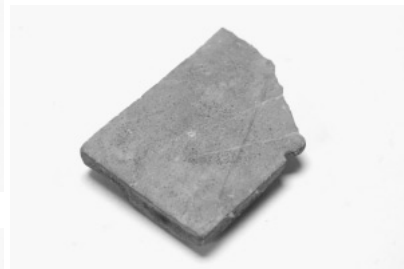
第11図12



第11図13



1区 石垣1裏込土出土遺物 (第11図9~20)



第11図15



1区 埋土F出土遺物 (第12図28~34)



第11図16



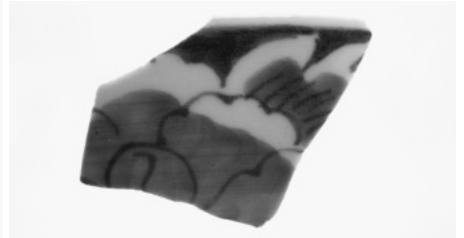
第12図23



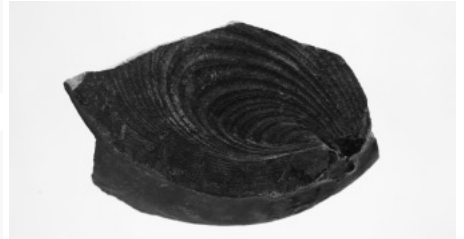
1区 埋土X出土遺物 (第12図35~39)



第12図26・27



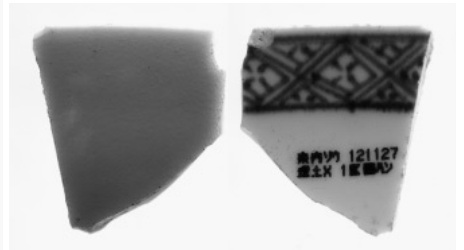
第12図28



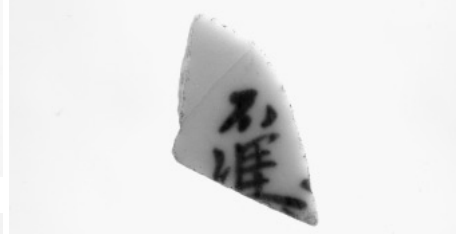
第12図30



1区 埋土H出土遺物 (第12図40~43)



第12図35 (外面・内面)



第13図55



2区 表土出土遺物 (第13図44~50)



第13図59

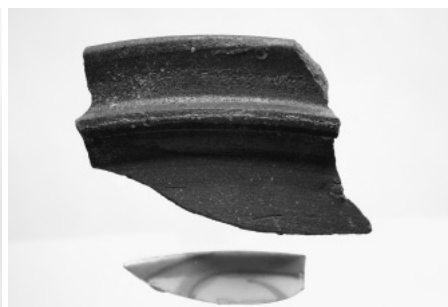


第14図64





2区 表土～石垣上面出土遺物 (第13図51～第14図65)



2区 石垣5裏込土出土遺物 (第14図67・66)



第14図73



2区 石垣5前面埋土出土遺物 (第14図68～75)



第15図76



第15図77 (表・裏)



2区 石垣3裏込土出土遺物 (第15図76・77・79～87)



第15図81



第15図82

# 報告書抄録

ふりがな	いしかわけんかなざわし かなざわじょうそうがまえあと 6							
書名	石川県金沢市 金沢城惣構跡VI							
副書名	金沢城下町遺跡(東内惣構跡 枯木橋南地点) 発掘調査報告書							
シリーズ名	金沢市文化財紀要							
シリーズ番号	292							
編著者名	前田 雪恵 楠 正勝 景山 和也							
編集機関	金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)							
所在地	〒920-0374 金沢市上安原南60番 Tel (076)269-2451 Fax (076)269-2452							
発行年月日	平成26(2014)年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °、'、''	東経 °、'、''	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かなざわじょうかまち 金沢城下町 いせき 遺跡 ひがしうちそうがまえあと (東内惣構跡 かれき ぼしみなみちてん 枯木橋南 地点)	いしかわけん 石川県 かなざわし 金沢市 おわりちよう1ちようめ 尾張町1丁目	172014	なし	36° 34' 14''	136° 39' 50''	2012.11.20 ～ 2012.12.20	10㎡	学術調査 保存整備
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
金沢城下町遺跡 (東内惣構跡 枯木橋南地点)	城下町 惣構	江戸時代		堀 石垣 5列		陶磁器、土器、瓦、土 製品、石製品、鋳滓、 金属製品		
	宅地	明治以降		礎石 1箇所 配石 1箇所				礎石2段
要 約	<p>調査の結果、現存のものも含めて5列の石垣が検出された。石垣は裏込土や堀の埋土から出土した遺物からみて、17世紀前半以前から18世紀末～19世紀初めまでの間に、4回の変遷をたどる。1～3段階は徐々に石垣を積みまして高くしてゆき、4段階のときに大幅に堀幅を狭めている。</p> <p>枯木橋北地点でみられた惣構最古段階の土堤は検出されなかった。また、堀を狭め埋め立てた土地は、高さを道路高に合わせて宅地に利用したようであるが、枯木橋北地点では狭めた堀を埋め立てずに宅地の地下室として利用していた点が異なる。</p>							

石川県 金沢市  
**金沢城 惣構跡 VI**  
 ～金沢城下町遺跡(東内惣構跡 枯木橋南地点)発掘調査報告書～

(『金沢市文化財紀要292』)

平成26年3月28日発行  
 (2014年)

発行 金沢市

編集 金沢市埋蔵文化財センター  
 〒920-0374  
 石川県金沢市上安原南60番  
 TEL (076)269-2451

印刷 カンダ印刷株式会社